

---

# 全力少女・サキ誇れ！

京(みやこ)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全力少女・サキ誇れ！

### 【コード】

N8650E

### 【作者名】

京<sup>みやこ</sup>

### 【あらすじ】

ずっと優等生として過ごしてきた僕はこれから変わらず生きていくはずだった。そう、ある少女と出逢うまでは。

## 初 十九歳の少年、見抜かれる

「あんた一条誠の息子？」

いきなり自分の家の前で小柄な少女に睨みつけられながら言われた。自分で言うのもなんだが、エリートの学校にしか通ったことのない僕にとっては初めての経験だった。

普通は怒ったり無視したりするのだろうが、いい子として十九年生きてきた僕は理想的な笑顔で答えた。

「そうですか、あなたは？」

大人相手だったら「しっかりしているのね。」なんて反応が返ってくるのだが、この少女はそういかなかった。

「気持ち悪っ。」

生まれて初めて言われた言葉にさすがに顔が引きつる。

何だ、この女。

心の奥に封じ込めていた本当の僕を引きずり出した相川咲あいかわさき。この咲と過ごした日々が僕の人生を変えたと言っていていいだろう。小柄で生意気で、真っ直ぐな咲との日々が。

「は？」

家の前で騒ぐわけにも行かないので、とりあえず少女を家の中に招き入れた。僕の親父は政治家、お袋はその付き添いで事務所に居ることが多く今家に居るのは僕とお手伝いさん、そしてこの少女だけだ。

「だから、私は一条誠の娘なの。」

変質者が居ます、と警察に通報したいぐらいだが政治家の家で警察騒動があつたら大事である。ましてや隠し子騒動など政治家の命

取りの内容だ。

「何詐欺ですか？振り込み詐欺もここまで進化したんですね。」

正直僕は政治家である親父のことはあまり好きではないが、自分に火の粉が飛んでくるのは嫌だ。だから警察を呼ぶ訳にはいかないが、詐欺や泥棒なら話は別だ。

「無理やり敬語なんて使わなくていいわよ。気持ち悪いから。」

「またもや失礼な発言を浴びせてくる。本当に何様なんだ、この女。ま、家の中だからいつか。お前は本当に何が言いたいんだ？」

外でも親の前ですら僕も優等生を演じている。勿論親が政治家、ということが大きく関係している。世の中の人は政治家なんて税金で生きているにつき相手だろうが、身近に政治家がいる人の反応はそれとは違う。政治家の知り合いがいるとか自慢したり自分もいい思いをしようとかごまをすったり、敵に回すと厄介だと顔色をうかがって接する人ばかりだ。そんな人達の前で平和にやり過ごす方法はただ一つ。『優等生』を演じること。

十九年もそれを続けて今まで何の指摘をされることもなかったのに、突然現れた訳のわからないことを言うこの少女に一瞬で見破られるなんて何てことだ。

「だから」

「あ、いいや。仮に親父の娘として、どうしたい訳？」

さっきと同じ台詞が返ってきたので少女が言おうとしたことを遮った。少女は「そっちが質問してきたんでしょ」と言わんばかりに一瞬ムツとしたが、すぐに表情を戻してさらりと言った。

「父親に会いに来て、何が悪いの？」

少女にしてみればもつともな意見かもしれない。だけど、僕にとっては全く理解のできない内容だった。

「悪いも何も、親父の娘って証明できんのか？」

「できたらもつと早く来てるわよ。」

「じゃあ、どんな理由で親父の娘って言うんだよ？」

「死んだ母親が言ってたからよ。」

「それで？」

「それだけ。」

「はっ？」

肩すかしもいいところである。親父の名前があったからといってそれがなんの証明になるのか。ただの同姓同名の可能性だつてあるわけだし。確かによくある名前ではないかもしれないけれど。

「あのなあ、それだけで証明できたら世の中大変なことになるぜ？」

「同じ大学出身ということも今のところわかつてる。」

「それでも、不十分だよ。」

「じゃあ、あんたは私が一条誠の娘じゃないって証明できるの？」

僕の方が押していた筈なのに、少女の一言に何の言葉も返せなかった。娘じゃないなんてきつと戸籍を見れば分かるだろうけど、そう言い返せなかったのは少女の目にすごい力を感じたからだ。

ガリガリの体からは想像もできないような、強い力を。

「ともかく、親父は今日帰らないぜ。だから日を改めて来いよ。」

このままじゃ埒があかないと思い、逃げるように後日来るよう促した。親父はお袋共々仕事で数日間家に帰ってこないと今朝言っていたのを思い出したのだ。

「私、帰る場所がないの。だからこうやって父親のところに来たのよ。」

そう言えばさつき母親が死んだとか言ってたな。そう言われると、力づくで追い出す訳にもいかないじゃないか。

「静枝さん、お願いします。」

「いいですよ。娘ができたみたいで、嬉しいわ。」

結局追い出すことが出来ない僕は、小さい頃から住み込みで働いている静江さんをお願いすることにした。

「でも火事にあつたつて、大変だったわね。」

そういうことにしておいた。家にあげる時は大学の同級生で発表の打ち合わせをするということにしておいたが、さすがにそれだけ

の理由で家に泊めるのはおかしい。と、言うことで火事にあい僕の家にはばらく置いてあげようということになったと無理やり話を作った。

「一人の割にはこの部屋、少し広かったのよ。」

静枝さんは旦那さんが早くに他界し、子どももいないことから僕の家族を羨ましがるように発言をよくしていたので嬉しそうである。きつと本当に娘のように可愛がつてくれるだろう。

「あ、それでお願いがああるんだけど。親には黙ってて欲しいんだ。ほら、彼女なのかとか言われたら困るしさ。」

この家に置く代わりに少女と交わした約束が一つある。それは、親父の娘と証明できるまで親父と会わないこと。理由は本当の娘じゃなかったらただの迷惑にしかならないので。本当の娘だったらどうせそれまでの平和な家庭なんて壊れるだろうから、その時は潔く受け入れることにした。

「わかりました。」

静枝さんは特に理由を聞くでもなくすんなりと受け入れてくれた。静枝さんの寝泊りしている部屋はいわゆる離れで、裏門から出入りできるから正門しか普段利用しない親からは目につかないだろう。トイレもシャワーも離れにあるから何も問題ない。

「ではそろそろ晩ご飯作りますね。」

「あ、手伝います。」

静枝さんが晩ご飯の準備をしようと、腕をまくりはじめるとすかさず少女が声を掛けた。僕に対してはツンツンしていただけに、その言動は以外なものだった。

「そんな訳にはいきません。私はこの家のお手伝いで、全ての家事を任されていますので。」

静枝さんは小さい頃に一緒にご飯を食べようと誘った時に僕に言ったことと、同じ返事を返した。

「でも、ただで居候させてもらう訳にいきません。」

喰い下がる少女に、僕は大事なことに気付いた。初歩的で、あり

えないようなミスに。

「まだ打ち合わせ終わってないだろ。続けようぜ。」

「は？何言って・・・」

大学の同級生という設定を忘れたかのように、少女がキツと鋭い眼差しを向けてきて一瞬怯んだが、それを振り切って僕は少女の腕を引つ張って無理やり自分の部屋へと連れて行った。

「ちよつと、痛いんだけど！」

少女は部屋に着くと腕を払い、不機嫌な様子を見せてきた。

そう、少女は。

「お前、名前は？」

かなり今更な質問だった。ただここに来た理由に驚いて、偽りの同級生を演じるにあたり一番知らないと困ることを聞いていなかったのだ。

「相川・・・咲。」

少女も拍子抜けしたかのように半ば驚いた顔で、ボソボソっと小さな声で自分の名前を名乗った。

「僕は一条真一。」

少女に・・・咲に続いて僕も名前を言うと、沈黙を経て笑いが起こった。

「名前、言っただけじゃなかったし聞いてなかったわね。」

「そっだよ。」

お互いに馬鹿ね、なんて表情で咲が始めて僕の前で笑顔を見せた。その笑顔には睨みつけてきた時の鋭さも、偉そうに発言する時の生意気さも微塵に感じられなかった。

だからだろう。

不覚にも、可愛いなんて思ってしまったんだ。

## 次 実は優等生？

「待ちなさいよ！」

大学に行こうといつも通りの時間に家を出た頃、後ろから咲が相変わらずの強気な様子で声を掛けてきた。

「ば、馬鹿！」

僕は咲が正門から堂々と出てきたのを見て周りをキョロキョロと確認し始めた。

「馬鹿つて何よ！」

「いいから、ほら行くぞ。」

とりあえず周りにご近所さんから見られていないことに僕はホッと安堵あんどした。

「近所の目もあるから、お前は少し時間をずらして裏口から出て来いよ。」

「あんたの親が居ない時も？」

「そう。そしてあんたじゃなくて真一だ。」

同級生と偽った以上咲がずっと家に居るわけにはいかない。かと言って若い女の人と僕と一緒に登校しているのを見られ、ましてやこうやって僕の家を出入りしているのを近所の人に見られるとどんな噂が立つのか考えるだけで恐ろしい。

「もしかして、本当に大学まで来るつもりか？」

最寄り駅に着くと、足早に歩く僕の後ろから一生懸命付いてきていた咲を振り返って質問した。

「だってどうするのよ。私、お金ないわよ。」

「え？」

「あんたの家に行くまでに全財産つき込んだもの。」

驚く僕を気にする様子もなく、咲は淡々と言った。

「じゃあお金渡すから、程よくその辺で時間潰して帰れよ。」

そう言っ僕は財布からお金を取り出して渡そうとしたが、咲は

受け取るうとしない。

「好きに使っていいから。」

「……」

「これだけあつたら今日はとりあえず何とか過ごせるだろ。明日からのことはまた考えとくから。」

「じゃあ、あんたの大学に行く。」

少し何かを考えていた咲が僕の手からお金を奪うと、また僕を驚かせる発言をした。

「好きに使っていいんでしょ？」

笑うこともなく、少しぶっきらぼうに言う咲に少し腹が立つ。

「だからって」

「行ったことないもの、大学。憧れていたのよ。」

少し悲しそうな表情になった咲の顔を見ると昨日の様に無理やり断ることができなくなった。僕ってば優しいのか、それともただ意思が弱いのか。

「鞆もなくうるうるしてたらさすがに……」

学生に見えないと言いかけて僕は途中で言葉を止めた。咲が鞆を持っていないということはおそらく荷物を詰めてきた大きめな鞆しかないのだろう。そしたら、まず学生に見えるようなグッズを揃えなければいけない。

「予定変更、まずお前を学生にしよう。あ、それより区役所に行くか。とつとと戸籍を見て親父の娘かどうか確認しようぜ。」

「馬鹿ね、戸籍で確認できるならとつとつとに行くてるわよ。」

確かにそうだ、と思った。

「お前婚外子ってことになるの？」

婚外子とは父母（夫婦）間に一度も法律上婚姻関係のなかった子を指し、父の認知がなければ戸籍の父欄は空欄となる。咲の言い方からすると、きつと父欄は空欄なのだろう。

「まあそんな感じね。」

じゃあどうやったら親子か親子じゃないか確認できるんだろう？

意外と長引きそうな戦いに僕は少し落胆した。法学部に通っている今、法律の知識は少しずつ増えているもののこういう時の解決方法はまだ知らない。

先生に質問してみるか？いや、駄目だ。自分で何とかしないと。

「で、どうするって？」

「はああ。買い物にでも行くか。」

解決策を考えている僕に咲が今からの予定を求めてきたので、僕は深いため息をついて街中に出ることにした。

「学校は？」

「一日休む位じゃ単位落とさないよ。それに今日は、午前中だけだし。」

「じゃあ昼から行けばいいじゃない。大学のどこかで待ってるから。」

「どうやらどうしても大学に行きたいらしい。これ以上意見を言っ  
てぶつかるのも面倒なので、僕は諦めたように咲と共に学校へと向  
かい始めた。」

「真一君、一緒に学校に来てた人誰？」

遅れて入った授業が終わると、一人の同級生（本物）の女の子が  
声を掛けてきた。教室の窓からは門が見える為、見られていたのだ  
ろう。

「あ、ああ。親戚。今浪人してて見学に来たと言って言うから連れて  
きたんだ。」

「何だ、そっか。」

お得意の優等生モードで適当な理由を考えると、疑うこともなく  
一安心しているこの女の子はおおくらかなこ大倉可南子。僕の彼女である。

「あ、迎えに来てるわよ。」

「えっ!？」

可南子の指差したドアの方には、確かにさっきまで一緒に居た咲  
の姿があった。部屋を教えなければよかった、と軽く後悔する。

「授業も体験したいんじゃない？」

「あ、なるほど。次は出席取らない先生だから、連れて行ってみるよ。」

可南子の余計とも思える一言にも僕は優等生モードを崩さない。全ては平和にやり過ごす為である。

「何してんだよ。」

次の時間違う講義を受講しているので可南子とは教室で別れ、咲と二人きりになると僕は小さい声で耳打ちするかのように咲に尋ねた。

「大学の図書館ってつまんない。みんな勉強してるし、居づらくて出てきちゃった。」

「あのなあ、お前が来たいって言ったんだろ？」

勿論これも小さい声で。咲は何か言いたそうな顔をしたが、何も言わずただ僕の顔を睨みつけた。

「次は出席取らない授業だから、もう行くぞ。」

次の講義は先生が一方的に喋る授業で、最後にレポートを提出すれば単位をもらえることを知っていた。その為、出席する必要はないと判断して大学を出ようとしたが咲はさっきのようにそれを制止した。

「じゃあ私が出ても怪しまれないのね？」

相変わらず強気に出てくる咲は意外にも少し嬉しそうな表情をしている。

結局僕は“親戚の子”の為にたくもない授業に出ることになった。出席を取らないのほとんど人気がない教室で、咲は嬉しそうに配られたプリントを眺めたり黒板を見たりと真剣に授業を受けている。

本当、よくわからないヤツだな。

先生の話の話を全く聞いていない僕は横目に咲を見ながら心の中でそう思った。

## 参 仮面の下

「ごちそうさま。」

昼ご飯を学食で食べ終えた後、咲は僕に丁寧にお礼を言った。大学に連れてくることになったのでさつき渡したお金は電車代を除いて僕の財布の中へと返ってきている。それと比べるとかなり少ない額なのに、しっかりとお礼を言ってきた咲に思わず目を見張ってしまふ。

「何よ？」

「お礼を言われて少しビックリして。」

「は？」

いつものように気の強い表情に戻った咲は、何を言っているのという反応を返してきた。

「ご飯を奢ってもらって当然、っていう女に見える？」

「いや、そういう訳では。」

本当はそう思ったのだが、争いにならないように誤魔化した。正直、僕は咲が親父に多額の金額を要求する為に来たと思っている。母親が死んで、多分独り身になった彼女は生活費に困ってとりあえず父親の可能性である親父の元に来たのだと。

だから僕の家から出るお金に感謝されるなんて思っていないかったのだ。

「ま、行くか。」

変な空気になる前に僕は席を立った。それに続いて咲も自分の食べた食器を返却コーナーへと運んでいく。

「真一君。」

偶然鉢合わせた可南子に思わず心の中で「げっ」とつぶやいた。

「あ、可南子もこの食堂だったのか。」

「うん。あ、こんにちは。」

親戚の子と信じている可南子は咲に挨拶をして僕は心の中でかな

り焦っていた。親戚という設定にしていると咲には伝えてないのだ。変なことを言うなよ、と願う。

「こんにちは。」

いつも通り愛嬌がいいとはいえない表情で咲も挨拶を返した。

「どうだった？ 大学は。」

「………楽しかったです。」

一瞬戸惑ったようにも見えたが、話を合わせようと咲は少しづつきらばうに答えた。とりあえず、一安心する。

「来年受けるの？」

「まだ、わかりません。」

「あ、可南子。課題終わった？」

二人が話している空間に耐えられなくなって僕は思わず割って入った。

「来週提出の？ 終わったよ。」

可南子はそんな僕を不思議に思うことなく、快く答えてくれる。

「先生の研究室まで持っていくんだよね？」

「そうそう。」

なんて他愛ないやりとりを何とかやり遂げ、咲と学食を後にした。

「気持ち悪っ。」

正門を出るやいなや安心感に浸っていた僕に咲がまた吐き捨てるように言った。

「何が。」

さすがに何回も言われると嫌気が差してくる。僕は歩くのを止め、不機嫌な様子を隠すこともなく、咲の後姿にぶつけた。

「優等生面して、楽しい？」

咲は半分振り返り、僕の目を見据えて考えないようにしていた核心をズバリついてきた。

「………楽しいさ。」

本当はすごく疲れていた。だけど、そんなことは言いたくなくて精一杯の見栄を張った。弱々しい声しか出なかった。心の中は

バレバレだったろうけど、咲はそれ以上何も言わずにまた前を向いて歩き始めた。

僕はゆっくりとその後ろについて歩いた。僕の方が歩くのは早いけど、なんとなく並びたくなくて駅に着くまでその状態だった。

「咲、恥ずかしいからやめてくれ。」

買い物に街中に来て五分足らず、咲は駅前にあるカフェの窓ガラスにびったりとくっついて中を凝視していた。その姿はどう見ても怪しく、一緒に居る僕ですら変人に思われかねない。

「あの服、可愛い。」

そう言う咲の視線の先にはそのカフェの制服を着た店員が居た。

可南子も一緒にここに来た時、そう言っていた気がする。

「でも普段着としてはおかしいな。コスプレになっちゃう。」

そう言いながらも僕は頭の中で勝手にカフェの制服を来た咲を想像してしまっていた。

似合う。

って僕は何考えてんだ！

コスプレ咲のビジョンをすぐさま頭の中から消し、俺はすぐに正気に戻った。

「何してんの？」

「わあっ！」

自分の世界に入っていた俺は突然目の前に現れた咲に驚き、後ろに後ずさった。

「あ、もう見なくていいのか？」

「やめろって言ったのそっちでしょ？」

確かにそうだけど。

「ね、私ここでバイトする！そしたら大学に行っているフリもできるし、お金も稼げるし。」

さつきまで咲がくつついていた窓ガラスには求人者の張り紙が貼りついていた。

「あ、ああ。いいんじゃないか？」

これからの咲のことをどうするか悩みの種だったけど、すぐに解決するとは助かった。

「履歴書と、証明写真を撮らなきゃ。面接は今日出来るのかしら。」  
咲は手馴れているかのように揃えなければいけないものをぶつぶつ呟き始めた。僕はアルバイトをしたことがないので、ただふんふんと聞いていた。

「よろしくね。」

人事のように聞いていたけど、そうだ。咲は今無一文なんだ。お金は僕が出すんだった。

「バイト代が降りたらちゃんと返すから。」

そう言つて咲は駅の中のコンビニ二へと歩き始めた。

「別にいいよ。そんなに高額じゃないし。」

履歴書に証明写真、千円あれば足りる。あ、電車賃や昼ご飯代をいれるともう少しするけれど、可南子とデートする時よりも低い出費は別に構いやしなかった。だけど、咲は僕の好意を受け取るうとはしなかった。

「返します。」

睨みつけながら、ゆっくりと低い声で言った咲を僕は少し怖いなんて思ってしまった。

僕はまだこの時全然わかっていなかった。

お金を稼ぐ大変さも、自分が働かなくても生きていける幸せさも

むしろ政治家の家に生まれ、父親と同じような道を歩むことを望まれている自分は可哀相だなんて思っていた。

本当に、何にもわかっていやしなかった。

#### 四 ことごとくツイてない

「はっ。」

咲と大学に來た次の日、僕は学食で昼ご飯を可南子と食べながら重要なことを思い出した。

「どうしたの？」

可南子が手に持っているフォークを止め、不思議そうな顔をしている。

「いや、次の授業のプリント忘れたかと思って。ほら、先週配ったの今週も使っちゃって言ってただろ？でも朝鞆に入れたの思い出したよ。」

いつも通りの優等生スマイルとそれらしい言い訳に可南子もいつも通りに「そうなんだ」と頷く。

「ね、次の土曜日暇？観たい映画があるんだ。」

少しも僕を疑わない可南子がデートに誘ってきた。

「土曜か。いいよ、何の映画？」

内心が進まないものの、断る理由も特にないので受け入れた。可南子が観たいのはやっぱりというか恋愛映画で、最近話題になっている映画だった。映画は久しぶりで楽しみだ、なんて思っていない台詞が口から出ては可南子を喜ばせた。

（楽しみだ、じゃないよ。）

昼の講義を聞きながら、僕は心の中で溜息をついた。咲が今日から雇ってもらえてラッキーだなんてさっきの昼ご飯時に思ってしまったからだ。咲が僕の家に来た理由は親父の娘かどうかを確認する為で、咲の生活を見守っていく為じゃない。

でも、どうやって？

戸籍で証明できないことはもう判明しているし、かと言って親父に隠し子の覚えはないか、なんて聞ける訳もない。

「真一君？」

考え事をしている僕を不思議に思ったのか、隣に座っている可南子が名前を呼んだがその声は名前を呼ばれたと脳で認識されることなく僕の耳をただ通過した。

「一条。」

「はい。」

突然教授から名前を呼ばれ、驚くもののすぐに返事をした。

いけないいけない、今は授業中なんだ。優等生モードを崩してはいけない。

「君は父親と自分は似ていると思うかね？」

「外見は似ていないですね。しかし、国に尽くしている父親の様に正義感溢れる人間になりたいとは思っています。」

教授はそうか、と感心して遺伝の話をつけて話し始めた。そうか、今日の講義テーマは遺伝だったな。僕は遺伝の話となると決まって嫌な気持ちになる。小さい頃からお父さんのように立派にならなきゃね、なんて言われ続けて育ったからだ。

それはさておき、優等生モードを継続して授業を聞いているフリをしている僕の横で可南子が不機嫌な様子になっていたことに僕は全く気付かなかった。

僕の頭の中は咲とのことであっぴいになっていたのだ。

「咲、遺伝子診断しよう。」

咲がバイトから帰ってきて僕の部屋に入ってくるや否やすぐに切り出した。昼の講義で遺伝の話聞いて閃ひびいたことだった。親父と一緒にということは僕らは義理の兄弟。遺伝子診断すれば同じ遺伝子が見つかる筈だ。

「嫌よ。」

咲の決断は早かった。

「何で。親父の娘かどうかすぐに結果が出るじゃないか。」

「病院には行きたくないの。」

幼い理由に、僕は呆れざるを得なかった。

「幼稚園児か、お前は！」

「姉に向かつて幼稚園児とは何よ！」

「誰が姉だ！……はっ！？」

どうやら咲は僕を驚かせるのが得意らしい。

「いくつと思っていたのよ。」

「十代。大学に行きたかったって言ってたからってつきり僕と同じか  
一つ下くらいかと。」

咲は元々背が低いが、かなり痩せている為に実際の身長よりも小さく見える。髪も無造作に短く切られ、化粧つけもないためにとてもじゃないけど年上には見えない。

「見る目ないわね。今年でもう二十三になったのよ。」  
「嘘だ。」

僕より三つも年上。僕の親はお見合いして半年ぐらいで結婚したと以前に聞いたことがあったので、計算すると咲は親父とお袋が出会う前に生まれていることになる。

「何が嘘よ。ま、若く見られて悪い気はしないけどね。」

咲は僕の不信な視線に気付きながらもそれほど不機嫌にはならな  
い。女つてどうして年齢をそう気にするのだろう。可南子だって浪  
人して大学に入ったので僕より一つ年上で、そのことを気にしてい  
る。男からしたらそんなのどうだっていいのに。

「とにかく、遺伝子診断をしようぜ。」

「嫌だつてば。」

「逃げるのかよ。」

「病院には行きたくないんだつてば。」

僕は問題をさっさと解決したいのに、咲は頑かたくに拒こぼんだ。金目当  
てて来た訳ではないと思っていた考えが揺らいでしまう。

結局小一時間言い合いをした結果、僕の意志は通らなかった。何  
て頑固な女なんだ。

「まず、お前の母親が僕の父親と同じ大学ということから調べよう。」

言い合いをして疲れた僕は違う視点から調べることにした。咲の言っていることも本当かわからないし、時間が掛かるのは覚悟しなければいけないと思っていたので半ば<sup>なか</sup>ヤケになっていた。

「どうやって?」

「大学の卒業アルバム見ればわかる筈だろ。」

「私の母親とあなたの父親、学年違うわよ。」

「マジかよ。」

どうしてこうごとく証明方法が消去されていくのか。日頃の行いが悪いと仕方ない気がするが、僕にはその覚えがない。

「でも一応見てみよう。」

僕はもしかして、という希望を捨てたくなくて前向きな発言をした。

「そうね。」

特に止めることはなく咲も同意した。だけど、また僕は運に見放された。

「鍵が閉まつてる。」

親父の大学アルバムが置いてあると思われる書斎に咲と一緒に行ったものの、鍵が閉まつていて入ることができない。何度かドアノブをガチャガチャと動かしたが、開く筈もなく、空しい時間だけが過ぎていく。

「考えたら大事な書類とかあるかもしれないもんな。当たり前か。」

僕はドアノブから手を離し、ドアに背もたれた。

「さすが政治家ね。それとも大臣候補だからなのかしら。」

「何の話?」

僕は咲の何気ない一言が理解できなかった。

「知らないの? 何大臣か忘れたけど、<sup>しゅうりやうぎ</sup>収賄容疑の掛かっている大臣がいてその人が辞任したらあなたの父親が最有力候補なのよ。」

「それ有名な話？」

「ニュースでやってたくらいだから有名じゃないの。私、それを観てお母さんとあなたの父親が一緒の大学ってこと知ったのよ。」

僕はテレビを全くと言っていい程観ないので、周りから親父の話題を振られてもわからないことが今までに何度もあった。今回もそのケースだ。

「大臣になったら、また周りがうるさくなるな。ずるずるとドアを伝って座り込みながら僕は嘆いた。父親が名声を得れば得るほど、周りは騒がしくなる。」

「何が嫌なのよ。」  
「がつくりとうなだれ、視線が床へと向いている僕の頭上から咲が質問してきた。」

「だから、親父の地位が高くなると張り付いてくるマスコミの数も増えるし、それと同時に僕にまでゴマをすってくる奴も多くなる。周りもとりあえず知り合いになったら得かも、とか言う気持ちで寄ってきたりするし、何より“お父さんみたいに立派にならなきゃね”なんて言われることが多くなるんだよ。」

「馬鹿じゃないの？」  
僕の溜息交じりの嘆きを咲はバツサリと言い捨てた。顔を上げた僕の視線は真っ直ぐに僕を見据えている咲の視線とぶつかった。

「一人で思い込んで、自分は可哀相だなんて。悲劇のヒロインのもり？」

僕は男だからヒロインじゃなくてヒーローと言っるのが正しい、なんて言う訳もない。

「馬鹿って・・・」  
今まで言われたことのない言葉の方に僕は反応した。“気持ち悪い”同様、咲に出会うまで人生で一度たりとも言われたことのない言葉に怒りが湧いてきた。

「馬鹿だから馬鹿って言ったのよ。そんな考え方をしているようじゃ、本当の友達と言える人もいないんでしょ？」

「ふざけんな！」

きつと怒鳴ったのも、人生で初めてだと思っ。

「お前に何がわかるんだよ！」

本当はもつと何か言いたいの、喧嘩もしたことはない僕には他の台詞が浮かばなかった。

「わかる訳ないでしょ！私には父親が居なかったんだから！」

咲も僕に負けじと怒鳴り始めた。

「あんたは自分のことしか考えられないの？あんたが大学に行けているのも、こうして大きい家に住むことが出来ているのも、何もなくても食事が出てくるのも、あんたの両親が精一杯働いて稼いでいるからでしょ！それなのに自分は可哀相なんて、本当に甘ったれたお坊ちゃんね。」

「なっ・・・！」

甘ったれたお坊ちゃんなんて・・・もう少しで成人になると言うのに、子ども扱いされたことに怒りはどんどん膨らんだ。だけど、情けないことにやっぱり次の言葉が出てこない。

咲の後ろで晩ご飯ができて呼びに来てくれた静枝さんが驚いて立ちすくんでいたけど、それに構う余裕なんかなかった。いつもの優等生モードに切り替えることなく、咲とお互いに睨み合ったまましばらく親父の書斎の前で時間を過ごした。

## 五 優等生はもう終わり

ゴンッ

「大丈夫？」

いつもと変わらない筈の朝、いつもと違う僕は教室に入る時に派手な音を発生させた。寝不足で足がふらつき、ドアをくぐることもなく壁へと激突したのだ。そんな僕を見て門で一緒になった可南子は心配の声を掛けてくれる。優しい子だ。

「うん。」

明らかに大丈夫じゃないが、僕はぶつけたおでこをさすりながらとりあえず頷いた。

「明日、止めとく？」

明日は可南子から映画のデートに誘われている日。気が進んでいなかったものの、少し調子を崩したくらいで断るのは男らしくない。僕はただ「大丈夫。」と一言だけ伝えると、引き続き心配そうな顔をしてきている可南子を置いて僕は教室の中へふらふらと入っていく。体を動かすことに精一杯で、可南子と話を続けることがきつかったのだ。

だから僕の背中を見ながら可南子が不信な顔へと変化していくのに全く気付くことが出来なかった。

「真一君、今日はもう帰ったら？」

午前の授業を何とか終え、昼ご飯を食べるに可南子と学食へ向かっている時に可南子心配してまた優しい声を掛けてくれた。

僕は授業を常に一番前の席で集中して受講しているのに、今日は一番後ろの席に座りずっと居眠りをしていた。先生と一緒に授業を受けている人達が驚きの眼差しを向けていたけれど、眠気に強く支配されていた僕は気にすることなく眠りの世界へと入っていた。

おかげで少し体が痛い。

「寝たから平気だよ。それに明日は何もないし。」

明日は休日なので、多少これ以上体調を崩しても大きな支障はないだろう。

そう思つて凝つた肩を回しながら僕がだるそうに言うとき可南子が心配から驚きと、そして怒りを含んだ表情へと変わった。

「そうね。」

いつもよりもトーンの低い可南子の相槌あいつちに続いて僕が驚く。

「じゃあ次の授業は別だから、今日はここでね。バイバイ。」

「え？」

いつもなら昼ご飯まで一緒なのに、僕を無視するかのよう可南子が行つてしまった。

睡眠をとつたものの、熟睡出来なかつたのが原因かまだ半分眠っている頭で僕は原因を一生懸命考える。

「あ。」

考えること約三十秒、僕は原因へと辿り着いた。

「明日、映画だった。」

そう、可南子が誘つてきたデートのことをすっかり忘れていたのだ。乗り気じゃないとは言え今まで忘れたことなどなかつたのに。しかも、朝は覚えていたのにどうして忘れてしまったのだろう。

「はあー。」

ちゃんと目が覚めたものの、こういう時どうすればいいのかわからなくて僕は深い溜息をついた。デートを忘れたこともなければ可南子を、いや、記憶上では人を怒らせたことのない僕は情けないことに今すぐく動揺している。

“あなたは自分のことしか考えられないの？”

昨日咲から言われた言葉を思い出してもう一度深いため息をつく。夜眠れなかつたのは紛れもなく咲のせいだった。その中で、一番ずしりときたこの言葉。

「当たってるよ。」

凶星を指されたら人は怒りの気持ちが湧くものだ。今まで周りを見ながらみつともない、なんて思っていたのに実際自分が指摘されたらこれだ。僕は今世界で一番みつともない人間に違いない。

「とりあえず、飯食うか。」

ここで立ち止まっても仕方がない。午後の授業に出るためのエネルギーを蓄える為に僕は一人で学食へと向かった。

この日以降も、僕と可南子が二人きりで学食でご飯を食べることはもう二度と無かった。

もう、二度と。

「前に戻ってきたね。」

睡眠と昼ご飯によるエネルギーを取った午後の授業、いつもの定位置へと振り返いた僕に話し掛けてきたのはいつも近くの席に座っている同級生の板橋君。エスカレーター式の幼稚園からずっと同じ学校で、今は学籍番号も前後だから彼とは話す機会が多い。おそらく同級生の男子の中では一番話す相手だと思う。

「ああ、もう眠くないから。」

「ふーん。」

僕の少しぶっきらぼうな答えに、板橋君はニヤニヤしながら頷いた。

「何かおかしい？」

「何か雰囲気変わったね？」

僕はこの瞬間ギクリとした。今まで僕が必死に演じ続けてきた『優等生』モードは午前中に爆睡してしまったことで跡形も無く崩れてしまっているのだ。頭では理解しているものの、初めて指摘されてどう反応すればいいのかわからない。

「そ、そうかな？」

勿論いつものお得意の言い訳も浮かばず、僕は板橋君から視線を逸らした。こういう好奇心の目で見られるのが嫌で『優等生』を演

じていたというのに。

「何か、親しみやすくなった気がする。」

「ただ僕が内心恐れていたことは裏腹に、板橋君は嬉しそうである。」

「今更だけど、真一って呼んでもいい？」

「ふえっ？」

思ってもいない反応に、僕の喉から思ってもいない裏声が出た。

板橋君は少し驚いた後、小さい声で笑い出した。

「幼稚園から今まで同じクラスになったことなくすごい優等生のイメージしかなかったけど、真一って面白い人間だったんだな。」

「まだ許可していないのに板橋君は僕のことを呼び捨てで呼んできた。でも、悪い気はしない。」

「そ、そうかな？」

自分でもわかるほど真っ赤な顔になった僕はついさっきと同じ台詞を繰り返した。

「僕のことかおるも名前かおるで呼んでよ。」

「か、薫？」

「そう。憧れてたんだ、呼び捨てで呼び合う男の友情。」

彼、薫はおそらく世間一般では理解されないような願望を口に出した。今まで同じクラスになったことが無くても、成績上位者に常に名前が載っていたので薫のことは知っていた。彼の父親は某大手企業の社長。きっと薫も『優等生』でなくてはならなかったのだ。

「薫。」

「うん。」

「薫。」

「……。」

「薫。」

「もういいって。」

「何度も薫と呼ぶ練習をしていたら薫に止められた。でも、ある程度反芻はんすうしてないとすぐに忘れてしまいそうだ。」

「真一。」

今度は薫が僕を呼ぶ練習をしてきた。僕みたいに何度も名前を連呼することは無かったけど、何故か無性におかしくなって二人で笑い始めた。さつき薫が笑った時同様、小さい笑い声だったが、長く笑うことが滅多にない僕にとっては大笑いに匹敵した。

“ 本当の友達と言える人もいないんでしょ？”

また昨日咲に言われた言葉を思い出した。これも凶星だった。

今まで『優等生』を演じている時に深い付き合いをしてきた人など一人もいなかった。特に必要なかったのだ。皆僕が『優等生』であることを一切疑わなかった為、大きな問題が生じることもなく平穏な毎日を過ごせていた。

だけど、先程の可南子のことを相談するような相手もいないことはすごく心細く、寂しいことだ。どうすればいいか、解決方法が見付からなくても話を聞いてもらえるような相手が居たら。

その考えは更に僕を動揺させた。

“ 本当の友達”

今からできるかもしれない。僕と一緒に笑っている、この薫になれるかもしれない。

なりたい。

生まれて初めて、そう思った。

## 六 何かを表現しているオブジェの前で

「本当にごめんなさい。」

土曜日の午前十一時半頃、僕は駅前の変わったタイトルで、何を表現しているのか全く理解できないオブジェの傍で可南子に頭を下げていた。息を切らし、汗をダラダラ流している姿からは、『優等生』モード時の爽やかさは微塵も感じられないに違いない。

「理由、聞いてもいい？」

本当の待ち合わせ時間は十時。可南子は待ち合わせ場所の定番であるそのオブジェの前で僕に連絡することなく約一時間半ずっと待っていたのだ。隣で同じように待ち合わせしている女の子の相手が来て、そのカップルが見えなくなるまで見届けた後何度も同じことを繰り返していたに違いない。

「それは……」

いつもだったら静枝さんが倒れて医者を呼んで、とか言い訳をするのに今日の僕はそんな気分になれなかった。咲が現れてから僕はおかしくなっている。

遅れた理由は今から二、三時間前にさかのぼる。

「病院に行こうって。」

「嫌。」

可南子とのデートに出発する前、熱で寝込んでしまった咲を病院に連れて行くこととしたけど前回同様あっさりと断られた。

親父の書斎の前で言い合いをしてから、咲とは全く喋っていないかった。咲はずっと静枝さんと離れの部屋で生活していたし、僕の部屋を訪れることも、またその逆もなかった。顔を合わせることもなくなっていたのだ。

そんな僕等を心配してか、静枝さんから咲が寝込んだと聞きこの離れに来た次第である。

「寝てれば治るわよ。いつも、そうだし。」

静枝さんの部屋の天井を睨みながら、咲はいつも通りの強気の口調で言った。でも、いつも通りの迫力は無い。

「でも、風邪は万病の元つて言いますし。ね？」

「……私、薬アレルギーがひどくて。だから、病院に行っても意味ないんです。飲める薬なんて、ほとんどないから。」

咲は僕に対する態度とは全く異なる態度で静枝さんに答えた。僕には上から目線なのに、静枝さんの前では普通の女の子だ。

「咲ちゃん。」

「すみません、眠らせてください。」

そう言つて咲はあっという間に眠りに入った。

「本当に、強情なんだから。」

僕は半ば呆れながら静かに立ち上がった。

「真一さん？」

「とりあえず薬局に行つてアレルギーが起こりにくい風邪薬買ってくるよ。市販で売られているくらいだからそんなに危険なんてないだろうし。それから果物とかもついでに。」

静枝さんの疑問に僕は一気に答えた。頭の中はもう咲の看病内容を考えていたのだ。

「あ、でも……」

静枝さんが何か言い掛けたが、僕は立ち止まることなく部屋に戻つて財布を握りしめ家を後にした。

そう、可南子との約束をまたもやすっかり忘れてしまっていたのだ。

理由を聞かれた僕は黙り込み、可南子は何も言わずに僕を見ている。

「もう、いいよ。」

沈黙が流れること数分、とうとう可南子が口を開いた。

「原因はあの親戚の子、でしょ？本当に親戚の子か知らないけど。」  
女の勘なのか、可南子は咲のことを言い当てた。僕は下げている視線を上げ、可南子の目を見た。

「浪人生って嘘をつく位だもんね。あの子、真一君の何？」

驚いたことに、咲が浪人生という嘘まで見抜いている。僕はもう可南子に全てを話すことにした。

「血縁者には違いない、筈。」

実際咲が僕とどういう関係なのか僕自身知らない。だからこついう風に曖昧にしか答えられないのだが、可南子がそれで納得する訳が無かった。

「“筈”って何よ。じゃあ私は真一君の何な訳？」

可南子が怒った表情をしている。今まで平穩に過ごしてきたので初めて見る表情だ。

「彼女だよ。」

僕は迷うことなくそうピシヤリと言いたかった。事実なのだからそう言えばいいのに、何故か言葉に出来ずに戸惑った表情で可南子を見つめてしまった。

「もう、いいよ。終わりにしましょう。さようなら。」

先程と同じ発言の後、可南子はそう言って僕に背中を向けて歩き始めた。

「可南子……」

僕は可南子の背中を見つめながら、一度だけ名前を呼んだ。呟くように呼んだ名前は届く訳も無く、そして勿論可南子が振り向くことも無く改札口を通り人込みの中へと消えていった。

どうして僕は追いかけないのだろう。

どうして僕は『彼女』だと即答出来なかったのだろう。

問い掛けるまでも無く、答えは出ている。

僕が偽りの姿で可南子と接していたからだ。

『優等生』という仮面をかぶっていた為に本当の友達が居なかったように、可南子とも上辺だけで付き合っていたのだ。可愛くて、優しく、何の申し分も無い筈の可南子を、一人の人間として接していなかったのだ。

そんな僕が、偉そうに追いかけて可南子を引き止めることなんて出来ない。

「僕って、本当は馬鹿な人間だったんだな。」

待ち合わせ場所のオブジェの前に僕は座り込んだ。全力疾走して走ってきた疲れが一気に押し寄せてきた。

しばらく僕はそこを動かずに目の前を横切っていく人をただじつと眺めていた。休みの日ということもあってカップルと思われる組み合わせがかなり多い。お互いに幸せそうにしているカップルが多けれど、明らかに片方が惚れ込んでいるというカップルも少なくなかった。

きっと僕と可南子もそうだったのだろう。

可南子が僕に思いを寄せてくれていたのは表情から見て取れた。

だから自分がフラれるなんて思っただけでなくて、常に上から視線だった気がする。

デートしてあげる

一緒に課題をしてあげる

キスをしてあげる・・・・・・・・・・・・・・・・

僕は可南子と付き合った一年半を思い出した。自分から一度だっただてデートに誘ったことがあっただろうか。こうしたら可南子が喜ぶかな、とか考えたことがあっただろうか。プレゼントだって店員さんにお任せしたりして、深く悩んだことなんてなかった。

今までそれで何も言われなかったから、それでいいのだと思っ  
いた。

）  
）

「薫だ。」

着信の鳴った携帯電話を開くと、薫からメールが届いていた。

『今日大倉さんと映画に行くって言ってたよね？僕今から買い物に行こうかな、と思つてて、もしよければお茶とか混ぜてもらえないかな？』

薫からの初メール。絵文字を全然使わないところが僕と一緒にいる。僕は返事をせずに代わりに電話を掛けた。

「薫？今から会える？・・・うん、ちょっと聞いて欲しい話がある。・・・今、駅前のオブジェのところに座ってる。・・・」

こんな風に誰かに話を聞いて貰いたいなんて初めてだった。自分がフラれた、なんて格好悪い話昔の僕だったら絶対に話さない。でも、薫にだったら別に構わない。むしろ聞いて欲しい。これが、本当の友達つてことなのだろうか。

「お待たせ。」

さっきの電話から三十分程経った頃だろうか、薫がかなり息を切らせて僕の前に現れた。そんなに急がなくても良かったのに、と思つた僕のキョトンとした表情に薫は脱力した。

「泣いてるかと思つて、慌てて来たのに。」

薫は息が荒いまま僕の横に座った。どうやら薫に電話した時、泣きそうな声をしていたらしい。

「ありがとう。」

僕は薫の心配が嬉しくて、素直に心からお礼を言った。

薫の息が元に戻ると、僕等はファミレスに行つてドリンクバーで四時間程粘つた。最初はご飯を食べ、可南子とのやりとりを聞いてもらっていたのだが、気付けば話は学校の話へと移りサークルに入つてみたいね、とまで逸れてそいた。

落ち込んでいた筈の僕はわりかし元気が戻り、友達のありがたさ

をしみじみと痛感した。

薫だけじゃなく、自分もこんなに喋る人だとは知らなかった。咲が現れてから初めて経験することや知ることがたくさんある。

ファミレスで四時間が経過した頃、本当はまだ話足りない気もしたが、今日は親が家に帰ってくる日だと思い出し二人で店を後にした。

「今日は本当、ありがとう。」

「ううん、また学校でね。」

僕は最後にまたお礼を言ってから薫と別れた。上辺だけで可南子と付き合っていたのは事実だが、何も感じない訳でもなかった。薫が居てくれて、本当に良かったと思う。

だけど今の僕は咲との関係をハッキリしなければいけないのだ。可南子にフラれた衝撃や薫へのありがたさの気持ちでそこを見失ってはいけない。

家が近づくにつれ僕は気を引き締めた。

## 七 収穫は後頭部

「お帰りなさい、真一さん。」

「ただいま、って本当は逆だね。」

家に着くと母親が出迎えてくれた。本来なら僕が家に居て両親に「お帰りなさい」と言う筈なのに、外出していた為に僕が言われている。両親の出張なんてなかったのではないかという錯覚に陥ってしまう。

「お帰り。」

リビングに入ると、親父……父さんがソファに座りコーヒーを飲んでくつろいでいた。

「ただいま。」

僕はそのまま父さんの正面のソファに座ると、静枝さんが紅茶を運んできてくれた。

「真一さん、可南子さんはお元気？」

ガチャン

父さんの横に座った母さんが何の脈絡もなく可南子の名前を出したもんだから、僕は思わず手に持ったティーカップを倒してしまった。

「あらあら。手に掛かってないですか？」

すかさず布巾ふきんを持って駆けつけてくれた静枝さんがテキパキと動きカップを片付け、すぐに新しい紅茶が運ばれてきた。

「ありがとうございます。」

静枝さんから新しい紅茶を受け取ると同時に、僕は気を取り直す。

「実は、別れたんだ。」

「まあ、いつ？」

「………今日。」

優等生だった僕は律義なことに可南子のことを両親に話していた。直接会わせたことはないものの度々話題に上がり、その度に優等生モードできつちりと応答していた。さすがに別れたことは言うつもりはなかったのだが、話を振られたもんだから少し考えた結果とりあえず報告することにした。

親の前ではまだ優等生を止められない僕。

「どうして？」

「えーと……価値観の不一致……と言うか……色々々。」

「色々って？」

見苦しく言いごもった僕に母さんはなおも追及してくる。女ってどうしてこう追及してくる生き物なのか。

可南子と別れた理由に色々も何も無いんだけどな。

「真一さん？」

「まあまあ、いいじゃないか。真一だって年頃なんだ。親に言いたくないことの二つや三つあるさ。」

意外にも僕の窮地きふちを救ってくれたのは父さんだった。思えば今まで可南子の質問をしてくるのは母さんばかりで、それにうんざりし始めた頃に父親はいつも話を終わらせてくれていた気がする。

「それより、そろそろ晩ご飯にしようか。」

父さんがそう言うと、静枝さんが慌しく動き始めた。母さんも納得していない顔をしているものの、それ以上追求してくることはない。

僕は何気なく父さんに守られていたんだ。

ちよつとしたことだけど、今更ながらに気付いた自分を少しだけ恥じた。

コンコン

「はい。」

「真一だけど。入っていい？」

父さんが書齋に入ったのを見計らって僕も書齋へと足を運んだ。父さんが書齋に居る時は仕事をしている時というイメージがあった為、こつやつて私用で訪れるたことは今までなかった気がする。

「どうした？」

「えーと、あの・・・」

さつき窮地から救ってくれたお礼を言おうと思っていたのだが、今更という気もして何も言葉が出てこない。そんな僕を父さんは不思議そうな顔で見つめている。

「アルバム、とかある？大学の。」

何かを言わねば、と考えると咲がさつと僕の頭をよぎった。そうだ、帰り道気を引き締めた筈なのに忘れるところだった。

「私の若い頃に興味があるのか？」

そんなんじゃないかと、何か手がかりを探ってやるという気持ちで言ったのに父さんは心なしか少し嬉しそうに見える。

「あ、うん。それに同じ大学だけど今と違うことがあるかな、って思ってた。」

僕はまたいつもの様にもっともらしい理由をとりあえずつけておいた。親の前でまだ本当の僕をさらけだしたくないという気持ちがまだ心のどこかにあるようで、無意識に口から出ていた。

「私も大学の頃付き合っていた女性と別れた時、しばらく何も手がつかなかったな。」

今までとは違って歯切れの悪い僕が落ち込んでいると悟ったのか、父さんが自分の話をサラッとした。

「父さんにもそんなことあったんだ。」

「あるさ。昔から社会はガラッと変わったが、人間の感情はそう変化しないものだよ。楽しい時は笑って、好きな人ができたらドキドキして、嫌なことがあったら落ち込んだり泣いたり。ただ最近はその当たり前のことが出来ない人が増えている気がするがね。いや、させてもらえないと言った方が正しいのかな。」

父さんの大学のアルバムを探しながら言ったその言葉に僕は心が

ずしりとした。今までの自分が見透かされているような、そんな気さえしてくる。

いや、そんな筈はない。今まで演じてきた優等生の僕は完璧だった筈だ。

でも、僕は何故か父さんの言葉に何も意見を言うことが出来ず、ただ父さんの背中をじっと見ているしか出来なかった。

「あつた。懐かしいな。」

見るからに時代を感じるアルバムと、そして大学生活の写真が収まっているのだろうアルバムを見つけた父さんはささっと埃をはらうと机の上にそれらを置いた。

「もう三十年前にもなるのか。」

柔らかな表情で父さんがアルバムをめくり始めると、僕はすかさず横から覗き込んだ。

「今とは大分授業内容も変わっているのだろうな。」

アルバムの最初の方である校舎や学長・教員の写真のページをゆつくりと、懐かしみながらめくっていく父さんは僕が知っている父さんとは違って見える。

「父さんは、どこか写ってる？」

「どっかに載ってた気がするが・・・あつた、これだ。」

そう言つて父さんが指差した部分には一人の男の人が写っていた。これが三十年前の父さんか、つて

「後頭部じゃわかんないつて！」

「そうだろうな。」

思わず口に出した僕の言葉に父さんはあつさりと頷いた。

「研究室の写真が確かあつた筈。」

今のやり取りが何でもなかった事のように父さんはその研究室の写真とやらを探し出す。今のやりとりが楽しかったのか、微かに笑いながら。

・・・父さんってこんな人だったっけ。

僕が今まで知っていた父さんは真面目で、必要以上の言葉を喋らないタイプだ。母さんがお喋りだからそれで上手くバランスが取れているのだろうが、少なくともこんな風に冗談というか特別に笑いが起こるような話をした記憶がない。

「父さん。」

僕は聞こうと思っていたことを口に出そうとしてその先に詰まってしまった。心臓がドクンと大きくなって今ものすごく緊張しているのだと気付かされる。

さりげなく聞こうと思っていただけなのに、一度詰まってしまうから頭の中が真っ白になってしまっている。

「何だ？」

そんな僕とは違ってかわって父さんは当然のことながら不思議そうな顔をしている。

「いや、その・・・大学時代に、か、彼女とか・・・いなかったのかなあ、って・・・」

やっと僕の口から出てきてくれた台詞は、覚えてたの言葉を一生懸命並べて喋っている幼子おさないのようだった。

「そんな聞き辛そうに聞かなくてもいいじゃないか。今は母さんも居ないし、親子なんだから。」

確かにそうだ。親子だからこそ恋愛話など恥ずかしいものにも感じられるが、本当は照れることなどないのだ。

「居たよ。二つ年下の、元気な人だった。」

写真とかはないの？って聞きたかったけど僕はそれ以上何も言えなかった。父さんが今まで見たことのない表情をしたからだ。

懐かしむというよりも切なそうな、少し弱々しい顔。仕事で疲れている時とは明らかに違う顔。

僕はそれ以上何も追及することが出来なくなって父さんの書斎をあとにした。

そしてそのまま永遠に理由を聞くことが出来ないかと思っていたが、それからあまり月日が経たないうちに僕はその理由を知ることになる。

それは僕と咲が知りたかった真実だった。

## 八 ふられた僕とガラガラ声の少女

書斎から自分の部屋に戻ると、僕は電気をつけずにベッドの上にボスつと寝転がった。そしてカーテンを閉めていない窓から入ってくる微かな光を仰向けあおむの状態かすで浴びながら、半分以上黒い雲に覆われている月をただ眺める。

コン コン

引力で導かれたかのように月を眺めてどれくらいの時間が経ったのだろう。何十分と経ったのかもしれないし、たったの数分かもしれない。とりあえず、部屋に戻ってからも少しドキドキしていた僕の心臓が落ち着いた後に気のせいではないかと思うような小さなノックが聞こえた。

カチャツ・・・キイツ

ゆっくりと開かれたドアから静かに入ってきたのは、勿論咲だった。

「親に見付かったらどうするんだよ。」

いつも通りに喋ったら一階に居る両親に聞こえてしまう気がして、僕は咲の姿を確認しながら小声で言った。それぐらい静かな夜なのだ。

「何よ、起きてるんじゃない。」

朝よりは少しマシになったガラガラ声で、咲も静かに言った。いや、風邪で小声しか出せないのかもしれない。心なしかいつもの強気も感じられない。

「大丈夫よ。今日は疲れて、もう寝るって静枝さんが言ってたから。」

「そう……」

視線を月に戻してそれから何も言わない僕を少し眺めた後、咲は無言で僕の横に座った。

「別れたんだって？」

咲らしくストレートで聞いてくるものの、いつもの強気がないせいか心をえぐられるような感じが全くしなかった。

「私のせい、よね？」

らしくないにも程がある。咲の表情は見えないものの、明らかに気にしているのがわかって僕は驚かすにはいらなかった。

「……ごめん。」

何も言わない僕がよっぽど落ち込んでいると思ったのか、いつそう小さな音声で咲は申し訳なさそうに謝った。

「……いや、咲のせいじゃないから。」

他にどう言えばいいのかわからず、僕はそう答えることしか出来ない。こんな時に気の利く言葉も思いつかない。

「……」

「いや、わかんねえや。咲のせいなのかも。咲が現れてから僕の生活ガラッと変わったから。」

「……」

「でも、不思議なことにすっかりとしているんだ。ずっと優等生の仮面を被ってて、息苦しくなったことは何回もあった。でも、どうすることもなくて。生まれ変わりたいって思ったこともあったけど、出来なかった。」

「……」

「そうだよな。思うだけだったんだから。周りも僕を疑うこともなくて、だからもうそれでいいやって。諦めて一生仮面を被ることに決めてたんだ。」

「……」

「……」

ずっと黙って話を聞いている咲に向かって一気に話をしていた僕

の会話が途絶えると、部屋の中にはただ静寂が広がるだけだった。

「でも、本当は違う。」

すうつと一度深く息を吸い込んで吐き出した後、僕は気付いてしまったことを口に出した。

「周りのせいにしてたんだ。優等生の僕じゃないといけないのは、皆がそれを望んでいるせいだって。だからしてあげてるって自分にずっと言い聞かせて生きてきた。」

そう思えば楽だった。元々勉強は嫌いじゃなかったから、好成绩を取る為の勉強はそれ程苦じゃなかった。

でも、本当はずっと恐れていたことがある。

「周りの望むような僕じゃなかったら、必要ないって思われる気がしていたんだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

薄々気付いてしまったことを言葉にすると、体が熱くなって鼻の奥がツンとし始めた。

「親はいい大学を出て、弁護士の経験も積んで、若くして選挙に当選して・・・・それで僕が出来損ないだったら、親は立派なのに、って白い目で見られるんじゃないかって怖かったんだ。」

金持ち学校に通っている内に、勉強してもいい成績が取れずにノイローゼになったクラスメイトが居た。生徒会長の姉と比べ続けられて自殺未遂を図った女の子が下の学年に居た。どんな悪さをしても親が汚いお金でもみ消す不良がどの学年にも居た。

正直やりたいようにやっている不良には憧れの気持ちも少なからずあったが、家柄を述べられ嘆かれて<sup>なげ</sup>いる彼らを見ると自分もその道に踏み入ろうとは思わなかった。

「見捨てられるのが、怖かった。」

汚い金で親から庇<sup>かば</sup>われずに学校から退学処分になった生徒も居た為、いい子で居なければという気持ちはいっそう強くなった。

「本当の友達なんか居なくても、一人じゃなければよかった。幻滅されて離れられるくらいなら、上辺の関係だけでも仲良くできていたら。僕は、咲みたいに一人ぼっちでも生きていけるほど強くないから。」

相変わらず月を見つめながら発言すればする程、心なしか目頭が熱くなつていくように感じる。

「自分がこんなにも弱い人間だなんて思わなかった。」

「そんなことないわよ。」

しばらく何も言わなかった咲の出した声が、真つ暗な部屋に僅かに響いた。

「人間は弱い。それに気付いて、受け入れることが出来ているアソタは弱くない。」

咲にはつくづく否定されてばかりだが、良い意味で否定されたのは初めてかもしれない。冷静にそう思っている自分にも僕は少し驚いていた。

ほとんど影にしか見えなかった咲のシルエットがみるみる近付いて、僕の横に静かに寝転がった。僕は視線を移すことなく、空気の流れだけでそれを感じ取っていた。

「私は、時折すごく怖くて仕方なくなる。何で生まれてきたんだろぅ？って。私は一体誰なの？って。」

神経を研ぎ澄ませていないと聞き逃してしまいそうな小さな咲の声はやっぱりガラガラで、まるで他の人と会話しているような錯覚に陥ってしまう。いつもと違って弱気な内容だからなおさらだ。

そして咲の意図する内容がその時の僕にはよくわからなかった。

「咲？」

再び静寂が訪れた頃、部屋の中が少しだけ明るくなった。綺麗な弧を描く下弦の月が真つ黒な雲から脱出している。

「寝てる？」

僕の呼びかけに反応しない咲は目を閉じて眠ってしまった。

月明かりではつきりと見える咲の寝顔は、とても白く儂い美少女の

姿だ。僕はその姿が恐ろしくさえ感じられた。

このまま目を覚まさないんじゃないかという、感覚に。

「弱気になり過ぎだよな。」

女にふられた僕に、風邪をひいた咲。そんな弱気な二人で会話したものだからきつとありえないことを思ってしまったのだ。

そうに違いない。

「つたく、風邪悪化したら大変だろうが。」

僕はガバッと起き上がり、咲をベッドにちゃんと寝かせて布団を掛けた。その後ベッドにもたれかかるように絨毯の上に座り込むと、妹がいたらこんな感じなのかな、と咲に言ったら怒られてしまいそうなることを思った。

私は一体誰なの？

咲が眠ってしまう前に発言した言葉が頭の中でリピートされながら、僕もそこで眠りへと入り込んでいく。

私は一体誰なの？

咲、そう思うのはきつと咲だけじゃない。誰だって一度は思ったことがある筈だよ。

僕だって、薫だって、可南子だって

そしてきつと親だって

どんなに憧れを持たれる大人だって、一度は考えたことがある筈だよ。

だって、咲が言ったように人間は弱いから。

誰かに自分の存在意義を示してもらえると安心する筈なんだ。

絶対、そうだよ。



## 九 ぐるぐるいぢやいぢや

ブロロロロツツ……

肌寒さと、遠くなつていくバイクの音で目を覚ました僕は一瞬にして体の痛さを感じた。それもその筈、絨毯じゅうたんの上に座つて眠っていたのだから。

「やっぱり寝るのは布団だよな……。」

そんな当たり前のことをポツリとつぶやきながら僕はそこで思いっきり体を伸ばした。まだまだ薄暗い部屋の中で何とか見えた時計が指す時間は五時半。いつもなら完璧に眠っている時間だ。

「寒っ。」

鼻水をズツと軽くすすりながら何か羽織はおる物を探していると、布と布が擦すれる音がした。それに反応して振り向くと、咲が上半身を起こした状態で僕の方を見ていた。

「……………」

「……………」

お互い寝ぼけているのか、二人して見つめ合ったまま静止している。

何だ、この図。

「おはよう。」

とりあえず出てきた僕の第一声に反応するかのように咲が動き出した。

「まだ、ご両親眠ってるわよね。今の内に静枝さんのとこに戻るわ。」

僕の挨拶を完全に無視して、咲が布団から出てくる。声は昨日よりも大分マシになっている。

「悪かったわね、布団占領して。」

「いや、別に。」

相手が誰であれ、女の前では格好つけてしまつのが男の性である。  
本当は寒くて体も痛いのに、僕は平気なふりをしてぶっきらぼうに  
返事をした。

「じゃ、また。」

「うん。・・・あ、待った！」

咲がドアから出て行こうとした瞬間、僕は異変に気付いて咲を呼  
び止めた。

「何よ？」

いつもの強気さが少し戻っている咲を今度は僕が無視して庭に目  
を凝らした。

まだ陽が上らずに薄暗い中、誰かが居る。

「親父だ。」

肌寒さをひしひしと感じているのだろう、腕を軽くさすりながら  
庭の花を眺めているのは間違ひなく親父だ。昨日早く寝たみたいだ  
ったから、早く目が覚めたのだろうか。それとも、毎朝の日課なの  
だろうか。

「咲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・!？」

まだ親父を直接見たことがないであろう咲を窓際に呼ぼうとする  
と、背中に人の体温をほんのりと感じた。考えるまでもなく、思い  
当たる人物は一人しかない。

「咲？」

いつも態度がでかかったからか気付かなかつたけど、咲は思った  
以上に小柄だった。身長は僕の肩までしかない。僕だって身長が高  
いわけではないから、きつと人混みに紛れたら埋もれてしまって探  
し出せないに違ひない。

「さ・・・・・・・・」

僕は咲の今の気持ちを瞬時に理解できなかつたから名前を呼ぶし  
か出来なかつたけど、咲が少し震えるような手で僕の服をキュツと  
掴むものだからそれすらも出来なくなつた。

とりあえず僕はもう一度庭に目を向けると、軽くストレッチをし

ていた親父と目が合ってしまった。

「お、はよう。」 ガラガラ

思いつきり目が合ったものだから無視するわけにもいかず、ゆっくりと窓を開けながら何とか聞こえるような声で父さんに挨拶をした。父さんも同じように挨拶を返してくる。

部屋の中よりも遥かにひんやりとした朝の空気が僕の頬に触れ、もう秋なのだと思わざるを得ない。

きつと青ざめているだろう僕の顔も、そのせいだと思いたい。

「早いな。」

まだほとんどの人が布団に包まれている時間帯、父さんはそれを考慮して普段より小さな声で喋るものの十分に僕に届く。

「あ、何か目が覚めちゃって。父さんこそ早いね。」

何気なく他愛なく返事をしているが、僕の心臓は人生で一番早くドクドクしている。おそらく父さんが何も反応しないから咲はすっぽりと僕で隠れてしまっているのだろう。

本当に？

いや、ここはポジティブに考えるんだ。ネガティブに考えたら負けだ。

頑張れ、僕。

と、頭の中ではぐるぐる、心臓はドクドクとした状態で何とか父さんと会話を無事に終えた僕は自分で自分を褒めたくなった。

いや、褒め「たい」じゃない。褒め「よう」。

よく頑張った、僕。

すごいぞ、僕。

「咲、親父もう家の中に戻っちゃったよ。」

親父が家の中に戻って数分後、ごちゃごちゃ考えていた頭の中をすっきりさせるとずっと僕の背中にくっついていた咲に声を掛けた。

「顔、見た？」

何も返事をしない咲が微かに頷く。もう震えはすっかり止まっている様だ。

「似てないわね。」

「へ？ああ、顔？僕は母さん似だからね。と、言っても自分ではよくわからないけど。」

「そう。」

会話終了。

あ、すごく気まずい。

「戻るわね。」

何事もなかったかのように咲はいつもの調子を取り戻し、僕の部屋から出て行った。ドアから出て行く時の咲の後姿は本当に小さくて、昨日咲の弱気な部分を見たからかもしれないが、か弱い女の子なんだと思い知らされた。元々は上から目線の強気な少女だということ忘れてしまいそうだ。

咲はどういう気持ちで僕の袖を掴んだのだろう。

親父の娘ということを証明に来たから、早く接触したいのではないかなと思っていた。でも、さっきの様子からだとそうじゃない気がする。

わからない。

咲の気持ちが。考えていることが。

僕は窓を閉めながら、少しショックを受けている自分に気が付いた。自分がここまで人の気持ちをわからないのだと気付いたからではなく、咲の気持ちがわからなかったから。

「え？」

いやいや、違う。人の気持ちがわからないのが情けないからショックを受けたのだ。咲じゃなくても、きっと同じ気持ちになる筈だ。

……多分。

じゃなくて、絶対。

・・・うん。

その後も僕はだんだんと明るくなっていく外をただ眺めることしか出来ないまま自問自答を繰り返した。

その日、睡眠不足で少しふらついていた僕は若さの欠片も見られなかったに違いない。

## 十 オレンジ色に溶ける

「え？」

寝不足の日曜日を乗り越えた月曜日、ある事件が起こった。

いや、事件という程のものじゃないのだろうが、それまでの真面目な可南子のことを思うと事件と言っていいのではないだろうか。

「大倉さん、さっきの選択授業に来てなかったけど、体調でも悪いのかな？」

僕のことだけじゃなく可南子のことまで心配していた薫は、二限目の授業が始まる前にそう教えてくれた。一度休んだくらいで単位が貰えないなんていう馬鹿げた話は聞いた事ないが、どんなに高熱を出そうが出欠を取らない授業にも必ず出席している可南子が居なかったなんて驚愕するに当たり前だ。

「僕のせいかな。」

「えっ！？あ、違う、そんなつもりで言ったんじゃない……」

勿論そんなことはわかっていた。でも、きっと僕が原因というのもあながち間違っていない。だから薫も強く否定できずに語尾が少しずつ小さくなり、最後には曖昧に声が消えてしまったのだろう。

しかし、腹立つ気持ちは全く無く、今の僕には可南子への心配と罪悪感の気持ちで一杯だった。

「でも、考えたら先週の真一と同じで違う席に座ったから気付かなかっただけかもしれない。教室の中に居る人を全員ちゃんと見た訳じゃなかったし。」

フォローしてくれる薫にも少し申し訳なさを感じてしまう。

別れた手前、どうしたの？なんてメールを送るのも気が引けてしまっし、今からの必須科目の授業で教室内をキョロキョロ見回すのもみっともなく感じる。

僕は一体どうすればいいのだろうか？

そんな風に悩んでいる間に昼が来て、一コマ空いて四限目の必須科目の授業にも可南子は来なかった。

「別れたのに連絡するのって、やっぱりおかしいよね？」

本日の授業が全て終わった直後、テキストや筆記具をしまわずに僕は薫に質問をした。可南子の姿を見なかった今日一日、そればかりを考えていた。

「そうかな？」

そんなハラハラのぼくとはうらはらに、薫はあっさりと返答をしてきた。

「僕は女の子と付き合い合ったことがないからよくわからないけど、友達に戻ることで無理なの？」

「……出来るの？」

僕は付き合った女の子が可南子が初めてではないが、そんなに経験があるわけでもない。

だからだろうか。恋人という関係になったら二度と友達に戻れないものだとばかり思っていた。

「大倉さんのこと、嫌いになった？」

「いや、僕の方は特に。でも向こうは、多分。」

「んー、じゃあ無理なのかな？」

結局解決せず。無難な人生しか送ってこなかった僕達に理解できる感情なんて、きつとほんの一握りしかないだろう。でも、こうやって話をするだけでも僕はきつと救われている。

薫という存在が、僕の中では既に大きな存在となっていることに気が付いている僕は少しだけ成長したのかもしれない。他人を受け入れることが出来たのは、何か少し悔しい気もするけれど咲のおかげだということも認めている。

だから無意識に出向いてしまったのだろう。

「は？」

学校の帰り道、他に相談する相手が見付からない僕は咲のバイト

先へと出向いた。

「客にその態度はないんじゃないのか？」

風邪もすっかり治ってしまった咲の雰囲気は最初に会った時そのものに戻っていた。だけど、弱っている咲よりはずっといいと思う。最初ここでアルバイトをしたと言った時、思わず想像してしまつた制服姿よりもずっと似合っている咲は与えられた仕事をテキパキと器用にこなしている。

「あのねえ、私は今仕事中であんたと世間話する余裕なんてないのよ。」

僕が頼んだアイスコーヒーにストローを挿しながら、小声で言うてくる。確かに店内の席には客がギッシリと詰まっているし、僕の後ろにはサラリーマンが並び、店の入り口には女子高生のグループがどれを注文しようかたむろして話している。

働いたことのない僕はこんなことにすら気付かなかつたのだ。

「悪かつたな。」

アイスコーヒーを咲から手渡される時、謝つた僕に咲が軽く溜息をした。

「思い出の場所とかにいるかもよ。ないの？そういう場所。」

伏せていた視線を上げた時、咲はもう次の客の注文したコーヒーを入れていて話し掛けることなんて出来なくなっていたけど、「ありがとう」とだけ言つて僕は店を出て走り始めた。

聞こえたかはわからない。だけど、僕をこつやつて走らせるだけの勢いをくれた咲には感謝したい。それから、実はそんなにコーヒーが好きじゃない僕の為に蜂蜜を少し入れてくれたことにも。

運動があまり得意でない僕は走る速度はそんなに速くないし、すぐに息切れして歩いたりしてしまう。コーヒーを飲むと喉が潤うどころか逆に喉が渴いてしまう気さえしたけど、僕は構わずに走つた。咲が言つた場所に、一ヶ所だけ心当たりがあるのだ。

定番のデートスポットで、街が見渡せる高さで、初めてデートし

た場所。行った後、初デートで行くと別れるというジンクスを聞いて二人で笑い飛ばしたことを思い出す。

まさか、本当にそんなことになるなんて思わなかった。

そこに居るに違いないという自信はそんなになかったけど、可南子はそこに居た。さすが咲。態度はでかいし、言い方はきついけど、やっぱり女の子だ。女の子の気持ちがわかるのだ。

おかげで僕は可南子と納得のいく別れ方ができた。

「遅いよ。」

僕が来ることを見越していたのか、汗をだらだらかいてせえせえ息切れしている僕の姿に驚くこともなく可南子が最初にそう口を開いた。

「なーんて、別れてるからこんなこと言うのおかしいか。」

僕に背を向けて手すりにもたれかかる。

「可南子。」

何とか整ってきた息を思い切り吸い込んで、僕は意を決して可南子の名前をはつきりと呼んだ。

優等生の僕としてでなく、一人の人間として、男として可南子の名前を呼んだ。

「やり直してくれないか？」

「.....」

可南子は何の返事もしない。僕に向けている背中からは少し考えているのだという様子が伺えた。

「僕は、可南子のことちゃんと見ていなかったと思う。だから」

「駄目だよ。」

可南子は振り返りながら僕の言葉を遮った。少しだけ潤んだ真っ直ぐな瞳に貫かれた僕は、それ以上何か言葉を発するなんて出来やしなかった。

「真一君は優しいから今度こそは大事にしようって思ってくれたんだろっけど、罪悪感で付き合っちゃ駄目。本当の愛じゃないもの。」

僕は最初可南子の言うことがよく理解できなかった。今度こそ大事にしたい、という気持ちで言ったのだが、確かに今まで申し訳ないという気持ちも確かにあった。

そう考えると可南子の言う通り罪悪感でやり直そうとしているのかもしれない。

「きつとお互い様だけだね。」

可南子がニコリと笑った。僕は未だに可南子の示していることがよくわかっていない。

「私も、真一君のことちゃんと見てなかった。」

夕陽が空だけでなく、街を、僕等の居る空間を全てオレンジ色に染めている。でも、その中で可南子が一番染まってしまうんじゃないかと思う。今まで見た中で最も綺麗で、幻想的な気がする。何か失礼な話なので本人には言えないけど、そう思った。

「入学式の時、新入生代表で挨拶をしている姿を見て一目惚れしたの。他にも同じような女の子はきつといただろうし、私の想いは嘘じゃなかった。」

昨日喧嘩別れした時と違って、穏やかな顔つきで可南子は言葉を続ける。

「だからすぐに告白したの。どんな人かも全然知らずに。でもそれって外だけしか見てなかったってことなのよね。」

僕達が付き合い始めたのはまだ周囲の人の顔も名前もまだ全然覚えられていない、入学して一週間経った頃くらいだ。恥ずかしそうに告白してくれた可南子はとても可愛くて、舞い上がって僕はすぐにOKしてしまったのだった。

勿論、格好悪いから表には微塵みじんも出さなかったけど。

「私は浪人して、死ぬ程努力してこの大学に入ったのに真一君は現役で何でもスマートにこなしちゃって、本当に理想の彼氏だった。何も不満なんかなかったのに、ある時冷静になったの。私は愛されているのか？って」

真っ直ぐに見つめる可南子の目を、僕は今見つめ返せない。僕の

隣で幸せそうに笑っていた可南子は、心の中で本当の僕に気付いていたのだ。いつも笑顔<sup>こくろ</sup>を繕っていた自分に。

「でも、“理想の彼氏”を手放したくなくて必死で自分に言い聞かせた。付き合っているから大丈夫、って。最後は意地になってたかな。」

可南子が再び僕に背を向けてオレンジ色の中に溶け込んでいく。その背中からはもう何の迷いも探し出せない。可南子はもう先の世界を見据えている。

僕を必要としていない、これからの自分の世界を。

「だから、お別れ。お互いの為にならないから。」

可南子の声と肩が少しずつ震えてきていることに気が付いたけど、僕にはどうすることも出来ない。もう僕は彼氏じゃないから。

「可南子。」

「もう行って。」

何を言えはいいのかわからなかったけど、気が付いたら可南子の名前を呼んでいた。でも、弱っている姿を必死で隠している可南子にそれ以上何も言えなかった。

僕は可南子の言う通りその場を静かに去った。

その次の日、大学にすつきりとした顔で現れた可南子と僕は普通に話しをした。

友達に戻ろうと、僕の方から伝えると可南子はすぐに頷いてくれた。恋人としては成り立たなかったけど、友達としてはいい関係だと思う。

あれから大分経って、社会をある程度把握してきている今でも。

咲が居なくなっただ、今でも。



## 十一 ドクドク、ドクン

「今日は何時にバイト終わるの？」

可南子と友達に戻れた日の放課後、僕はまた一人で咲のバイト先へと向かった。家には両親が居るし、携帯電話を持っていない咲とはメールをすることも出来ず、かと言って静枝さんと一緒に部屋で寝泊りしている離れへ電話を掛けたり会いに行くのも何だか恥ずかしくて出来ない。

だから咲と話す為にこのバイト先へと来たのだ。

「あと三十分。」

店の壁に掛かっている時計をチラリと見やると、咲は短くそう返事をした。

「じゃあ、店の中で飲みながら待つてるから。」

昨日と同じアイスコーヒを頼んだ僕のコーヒに、昨日と同じように蜂蜜を入れてくれている咲は何の返事もしなかったけど、それが「わかった。」という返事だと受け取った僕は窓際の席で四十五分を過ごした。

腕時計を見ながら三十分掛けて飲み終わるように計算されたアイスコーヒのカップが空になった頃、咲の方を見やると作業を止める素振りもなく、ただ与えられた仕事をこなしている。「時間だよ」と言いに行きたかったけど、次から次に注文されてくるドリンクを手際よく作り出している姿を見るとそれをすることも出来ず、ただ黙って空のカップを潰りしめたまま席に座っていた。

「次のシフトの子が少し遅れたからね。珍しくないことよ。」

座って四十分が経った頃、咲が一人の男性と交代し、それから五分が経って私服へと着替えた咲がようやく僕の元へと辿り着いた。

「遅かったね。」と言うと、混んでいるあの時間帯、すぐに帰れないことは特別なことではないらしかった。

「それで？どうしたの？」

少し疲れた顔の咲が、いつも通りの口調で僕に尋ねてきた。

「あ、ああ。可南子と友達に戻れたよ。一応報告しておこうと思っ  
て。」

「そ、よかったわね。」

咲の柔らかい笑顔を見ると、何だか不思議な気持ちになる。最初は気が強くて生意気で、こんな風に笑ったりしていなかった。そんな咲が笑うと、何故だか心が温かくなる気がした。

「あ、それでさ、お礼も兼ねて今日晩ご飯でも奢おごろうかと思って。もしくは何かプレゼント。」

何故か僕の心臓はドクドクと鼓動が早くなっている。可南子を、いや、前付き合っていた彼女とのデートの時ですらこんなに変な拍動をうった記憶はない。

「いらぬわよ、プレゼントなんて。」

僕の心臓がドクン、と一回大きな音を立て、体が変に緊張をしていることに気が付いた。

「ご飯も、今から食べて帰るなんて言ったら静枝さんに失礼でしょ。」

足が動かなくなってしまった僕と咲の距離が少しずつ開いていく。次の言葉が出てこない僕は、ただ茫然ぼうぜんと咲の後姿に釘付けになっている。一昨日、僕の部屋を出て行く咲の背中では小さかったのに、今の咲の背筋はシャンと伸びていて、僕なんかよりも数倍大きな人間に見える。

「次の土曜日。」

少しずつ小さくなっていった咲のサイズが一定になった頃、前を向いたままポソリと一言だけ発した。

「え？」

「だから、次の土曜日。」

数秒程反応できずにいた僕が聞き返すと、咲がもう一度乱暴に同じ言葉を繰り返した。

「バイト夕方からの。だからそれまでどこかに連れて行ってよ。」  
思わず唾然あぜんとした僕を置いて咲はまた歩き出す。

僕が唾然としたのは咲の要望があまりにも予想外だったからだ。だってお礼と言ったら形の残る、例えば有名店の服とかブランドの小物だとかを、咲のことだからさういのは欲しがらないだろうが、とりあえず何か特定のものを要求すると思っていた。それが今すぐ親父に会わせるとか。

それなのに、咲が望んだのは“どこかに連れて行ってもらうこと”。

本当にそんなものでいいのだろうか？

「いつまでそうしているつもり？」

「へ？うわあっ！！！」

いつまでたつても歩き出さない僕にいらついで、咲が僕の顔を覗きこんでいた。さつきまでは逞たくましく感じた背中が遠くに見えていたのに、今は咲の顔がドアップに僕の瞳に映り込んでいる。

「そこでポツケー、と突っ立っていたら野良犬にでも襲われるわよ。」

「は？いや、ありえないでしょ。犬は人間のパートナーとも言える存在なんだから。」

「……」  
咲がものすつごく呆おきれた顔で僕を眺めている。僕はなぜそんな反応が返ってくるのかわからない。

「あんたがボンボンで高級住宅街に住んでいるってことすつかり忘れてた。」

何のことが解明できない僕を置いて咲がまた歩き出す。

咲は高級住宅街で飼われている犬が血統書付きだとか、大人しい犬が多いことを言っていたのだろう。それはただの偏見だと思うが、咲が本当にそう思っていたことすら今の僕には確認することが出来ない。

まあ、居たとしてもそんな馬鹿馬鹿しい質問に答えてくれたかはわからないけど。

ねえ、咲。

二人で出掛けたあの土曜日は楽しかった？

## 十二 紫＋赤Ⅱ？

「着いたあゝ。」

「人が少なくていいわね。」

約束の土曜日、僕と咲は約束通り二人で出掛けていた。行き先は何故か寺。全然予定に考えてもいなかった寺。

咲がどんなところに行きたいのかわからないので、とりあえず図書館でガイド本を借りてきてめくっていたところ、咲が後ろの方のページにさりげなく載っていたこの寺に喰いついたのだ。

「本当、何でこんなところに。」

テンションが上がっている咲を尻目に僕はボソッと呟いた。

別に嫌な訳じゃない。昔からの建造物は趣を感じるし、何かホッとする感じがするから好きだ。でも、咲と最初に二人で出掛けるのはもっと若い二人が出掛けるような場所が良かった。

それが何故だと言われるとわからないのだが。

「あ、あっち中に入れるみたいよ。」

咲が中に入れる建物を見つけたらしく、ふいに僕の手を引いて歩き始めた。

ドクン

僕の胸が一度だけ大きく音を奏でた。

それが何故だと言われるとわからない。

「あ、売店があるわよ。って何ぐったりしてるのよ。」

中に入れる建物、なんとか堂（旧字体で書いてあるので読めない）から出てきた僕はいつになくぐったりとしていた。原因は咲がいつもと違いすぎるから。

「別に。何も。」

全然説得力など無いが、咲の興味の矛先は既に売店へと向いていたのでそれ以上何かを突っ込まれるわけでもなく「ふーん。」とだけ

け発してまた僕の手を引いて歩き始めた。

そう、咲はなんとか堂に入る前から引っ張っている僕の手をずっと握りしめたままなのだ。決して強い力ではなかったのだが、僕の手はまるで磁石になってしまったかのように咲の手から離れようとしなかった。

それが何故だと言われると・・・

「ねえ、聞いている?」

「え? ああ、いいんじゃない?」

咲とつながったままの手をポーッと眺めていた僕は勿論咲の話を聞いていなかったたので曖昧な返事をする、仕方ないというか咲の怒った反応が返ってきた。

「何がよ。」

「え、えつと、、食べたいならたい焼き買っても。。。」

咲がはぁーつと溜息をついて呆れた顔を向けて何かきつい一言を言ってくる・・・と、思っていた僕は思わず身構えてしまう。

けれども帰ってきたのは意外な反応だった。

「何でたい焼きなのよ。ここの名物は蕎麦そばなのに。変なの。」

笑いながら咲が片手で持っているいくつもの携帯ストラップを僕の目の前に突き出した。

「色がたくさんあるのよ。あんただったら何色にする?」

僕の目の前に突き出されたストラップには勾玉と、ご丁寧ご丁寧に寺の名前が書かれているプレートがぶら下がっており、全体のバランスを考えるとかわいいと言えるかどうか微妙なストラップだった。咲が迷っている勾玉の色は水色、黄色、赤色、緑色、紫色と色とりどりで迷ってしまうのは確かに仕方がない気がする。

「えつと、僕だったら」

「紫色っぽいわよね。」

質問してきたくせに、僕が答える前にすっぱりと自分の意見を言う咲に少しだけ笑いがこみあげてくる。そして、驚きも。

「何で?」

「紫って情熱の赤と冷静の青を混ぜた色で、二面性を持っているっていうことじゃない。普段猫かぶっているあんたのイメージとピッタリよ。」

嫌味っぽくなく咲が淡々と言うものだから、思わず「ああ、なるほど。」なんて納得しそうになってハツと僕は気付く。

「失礼じゃない？」

「間違ってる？」

「間違ってる……ないかもだけど……でも、最近、そうでもないと思うけどなあ。」

強くは言い返せないけど、でも最近の僕は変わってきていると思う。授業中に寝たり、可南子の前でかつこ悪い姿を晒したり、咲と出会う前では考えられない僕になってきている。

でも、後悔の気持ちはなくむしろすつきりしている。大学はほとんど自己責任の世界で、高校までのように授業に出なくても先生から叱咤しつたされることはないのだ。勿論、出席にうるさい先生は別だろうが。

僕は自分が思っていたよりもずっと自由に生きていける人間だった。周りが父親のようになれといっても、親から強要された記憶は一切ない。誰も僕を縛りつけてなどいなかった。

自分で勝手に何かに縛られていただけだったのだ。

「自信を持って言わないと説得力ないわよ。そんなことより、あんたからみた私って何色？」

「赤。」

僕は自分でもビックリするくらいの速度で即答した。

咲のイメージの色なんて考えたことなかったけど、突然僕の前に現れ今までの生活を代えたインパクト大の咲は赤色以外の何色でもない。

「そ。」

そう一言だけ発して咲はようやく僕の手を離してレジの方へと向かっていった。

何だろう？今日の咲は大人しい。

と、言うか女っぽく見えてしまう。

いやいやいや、元々生物学的に考えて女なんだけれども。でも、いつもの棘とげがない咲は調子が狂うとはいえ可愛いくて愛おしいとさえ思える。

「え？」

可愛い？愛おしい？

「変な顔してどうしたの？」

「わあああっ！！」

自分でも予想外のことを考え戸惑っている内に咲が突然僕の視界に入ってくるものだから、ひっくり返ってしまっくらいに驚いた。

「あんた今日変じゃない？」

予想外の反応が返ってきた咲は驚くというよりも不審な目で僕をじつと見る。

「そ、そう？」

真っ直ぐと僕を見つめてくる強い眼差しに、また胸がドクンとした。

「そろそろ出ようかしらね。結構ここまで時間が掛かったし。」

「そ、そうだな。」

変な汗が噴き出してきた僕はそれを悟られないよう、咲の前を歩きます。

「ねえ。」

「何？」

僕の少し後ろを歩いている咲の問いかけに、振り返ることなく僕は返事をした。

「ここ、忘れないでね。」

「え？」

咲の意味することがわからなくて、僕は思わず立ち止まって振り返ってしまった。変な汗はまだ乾いていない。

「約束よ。」

立ち止まってしまった僕の横を、咲がスツと歩いて追い越していく。僕と目を合わせることなく、ただ前を向いて。

「咲？」

僕の問いかけに何も反応せず、咲はスタスタと歩いていく。ただ真っ直ぐに。

「咲？」

咲の後姿が少しずつ遠くなっていく。

何故だろう

僕は

このまま咲が居なくなってしまうのではないかという

どうしようもない不安に駆られた

「咲……」

急いで追いかけないといけないのに、靴が道路と一体化してしまったかのように僕の足はここから動かない。

「咲。咲。咲……」

曲がり角を曲がってしまった咲の姿はもう全然見えない。

その咲の名前を、母親とはぐれてしまった子どものように僕はひたすら呼び続ける。咲は戻ってこない。きっと僕の声すらも聞こえていないだろう。

怖い。

昔は本当の自分を知られることが怖かった。誰からも相手にされなくなるのではないかという僕の勝手な思い込みで。

でも今は咲を失うことが、咲が居なくなることがどうしようもなく怖い。

それが何故だと・・・

言われなくてもわかっている。

僕は、咲に惹かれているのだ。

気が強いけど、本当は優しくして、僕の背中に隠れるような弱さを持っている咲に。

兄弟かもしれない、咲に。

### 十三 逆ギレとは何ぞや!?

「ありえない! 次の電車まで五十分もあるのよ。」  
電車を待つ改札口前のベンチで、咲がいつもの気の強さで僕に怒りをぶつけてくる。

「何も無い所でボーっとして、意味わからない!」  
全くその通りである。不覚にも少し泣きそうになってしまった自分を思い起こすと、ただ恥ずかしさだけが込みあがってくる。

「もう、バイトに間に合うかしら。」

「悪かったよ!」

「それ、謝ってるの!?!」

「謝ってるよ!」

「逆ギレ!?!」

「日本語喋れ!」

待ち時間が五十分もあるとあって周りに人気はなく、駅員さんですら奥の部屋に入り込んで休憩している。そんな訳で虫の声すら聞こえないこの場所、僕らの声がものすごく響いている。

「あんた・・・あはははははは!」

ついさっきまですごい剣幕で怒鳴っていたのに、咲は何か詰まっただかのように口が止まったかと思うと腹の底から笑い始めた。

「な、何だよ。」

僕は咲が何故笑っているのか理解出来ず、咲の心からの笑顔に見入ってしまうしかなかった。

「こ、ここまでとは。そっか、テレビ見ないならわからないわよね。」

笑い過ぎて咲が苦しそうに言葉を並べる。咲ってこんな風に笑う子だったんだ、なんておっさんくさいことを僕は思ってしまう。

さて、僕が今理解できなかった“逆ギレ”とは自分が怒られていることに耐え切れず、開き直って被害者に向かって逆に怒り出

す現象を指すらしい。ある大物が作った造語で今や普通に使われている言葉らしいが、テレビを見ない僕にとっては初めて聞いた言葉だったのだ。

「本当、あんたと居ると初めてのことだらけ。」

「こっちの台詞だよ。」

「何ですって!?!」

さっきの爆笑から一転、またさっきと同じようなやりとりへと戻ってしまった。

「女の子はこっ、優しくふんわりと笑って、男の三歩後ろを歩くよ  
うな子が」

「だっさ!古臭いこと言ってるじゃないわよ。」

「古いって……」

今の日本でそんなことを唱える若者なんて、僕くらいじゃなかるうか。僕だつて女の子に三歩後ろを歩いて欲しい訳じゃない。横に並んで、一緒に成長していきたくらい思っている。

つまり今の言葉はアヤであつて、本音ではない。冗談であつて、本気の言葉じゃない。それなのにバツサリと咲に切り捨てられた僕は絶句する以外の術すべを知らない。

「女の子に立てて欲しいなんて、最近の男は軟弱つてよく聞くけど本当のようね。」

「それはどこから得た情報だ!しかも、僕が軟弱つていう意味か!」  
「?」

「自覚なかったの?」

「なかったよ!今まで「しっかりしているのね」なんて言われて育て、咲みたいにポツロポロに言ってくる生意気女なんていなかったからな!」

「生意気ですってえ!?!」

「そっちこそ自覚なかったのかよ。」

「だつて生意気じゃないもの!」

「認めるよ!僕も認めただから!」

「あんたは事実だからでしょ!？」

「何だと!？」

「何よ!？」

と、言うようなやり取りを続けること数十分、声が二人共おかし  
くなつてきた頃に電車が到着して僕等の言い争いはようやく終了し  
た。

電車が到着する十分前程から増え始めた人達や、何分前からかは  
わからないが駅員さんも僕らのやりとりをずっと見ていたことに気  
がついたのは改札口を通る時だった。既に<sup>すで</sup>に疲れ切った僕達は電車の  
座席でぐったりとしながら、一緒の駅から乗った乗客が時折横目で  
見てくる視線を感じて恥ずかしくなった。

不必要に目立たないように生きてきたのになあ、なんてどんどん  
都会の風景へと変化していく窓の外を見ながら僕はぼんやりと思っ  
た。横に座っている咲は寝息を立てている。

「あの男の子かっこよくない？」

「でも女付きかあ。」

少し離れたドアの前に座っている、僕と同世代くらいの女の子二  
人がチラチラとこつちを見ながら会話をしている。あまり自惚<sup>うぬぼ</sup>れて  
いるつもりはないが、たまに声を掛けられることもあって(逆ナン  
ということを後で知る)、おそらく僕のことを言っているのだと思  
う。

恋人に見えるのか。

電車が揺れた弾みで僕の肩に寄り掛かってきた咲を眺めながら、  
少しか嬉しさが込み上げてきた。それと同時に

ズキッ

さつきまでとは違う感覚が胸に響いた。その原因は言うまでもな  
い。姉弟かもしれないと考えると、惹かれ始めているこの気持ち  
を否定しなくてはならないのだ。

「僕は馬鹿だな。」

本当に馬鹿げている。ちゃんと見ていたら可南子のこと本当に好

きになっていて、未だに誰もがうらやむ恋人のままだったかもしれないのに。それでなくても血が繋がっているかもしれない咲のこと、こうやって気になり始めなかったのかもしれないのに。

でも、もう引き返せない。

「咲。」

返事はない。まだ覚めそうな気配もない。それをいいことに僕は咲の頭にそっとキスをした。

「咲。」

もう一度だけ名前を呼んで僕も眠りに入る。降りる駅までもうそんなに長くはかからないけど、でも、どうしても眠りたかった。頭をリセットして、次に咲と会話するときには何事もなかったかのようにするために。

僕は逃げるように眠り込んだ。

## 十四 カラカラ

「本当に行くのかよ。」  
「当たり前でしょ。疲れたくらいで休みますなんて、常識のない人の言い訳よ。」

咲のバイト先がある駅の横の小道でいつものようなやりとりを交わす。電車から降りた出口が咲のバイト先の出口と反対側だったのだ。

電車を一度乗り換えてからもずっと寝続けていた咲はよっぽど疲れているのだろう。そう思ってバイトを休んだらどうかと提案したところ、案の定というかバツサリと却下された。

「帰り、暗いから気をつけるよ。」

「何よ、突然。まるで親みたいね。」

そう発言した後、咲の表情が暗くなった。しばらく僕達の中で話題にならなかった親のことを口に出してしまったからだ。

「もう行くわね。」

「待つて。」

ひらりと身を翻しバイト先へと向かい始める咲の腕を僕は咄嗟に掴んだ。

「何よ。」

鋭い目つきで僕を睨みつける咲にはまだ圧倒してしまうけれど、いつまでも怯んでる訳にはいかない。

「今のままじゃ駄目だよ。どこにも進めない。」

「……………」

「咲が来て、僕は変わった。咲が変えてくれたんだ。僕の今までのつまらない人生を。」

「……………」

「でも、咲は？咲の知りたかったことに全然近づけてないよね？何も変わってないよね？」

「変わってるわよ。」

束の間黙っていた咲が、またキツと僕を睨みつける。

「変わったわよ。世界観が変わったのは、あんただけじゃない。」

思わず僕は咲の腕を離してしまった。咲の目に、うっすらと涙が浮かんでいる。

「遅れちゃう。」

そう言って一歩踏み出した咲をどうしても止めないといけないという衝動に駆られている僕は、自分でも驚く行動をとった。

バサッ

咲が手に持っていた鞆を道路の上に落とした。僕の前に現れた時に持っていた少し大きめの鞆じゃなくて、静江さんから貰って大事に使っている鞆を。

ドクン

僕の胸が、大きく響く。自分の腕の中にすっぽりと収まってしまった小さな咲の体温をあまりにも近くで感じて。

「は、離さないよ。」

後ろから抱きついた咲の言葉も、あの鋭い睨みがなければただ宙に消えていくだけである。

「やだ。」

僕は咲の言葉を拒んだ。

大きく鳴り続ける鼓動はもしかしたら咲に届いているかもしれない。でも、ばれてもいい。もう自分に嘘はつきたくない。

「離して。」

「やだ。」

僕は咲が逃げられないよう、腕にさらに力を加えた。

頭が狂ってしまったと言われても仕方がない。でも、咲を離した

くはなかった。小さくて、震えている咲を。

「……ん？震えている？」

「咲？」

「ゴホッ、ゴホッ……離し、て」

咲の苦しそうに咳き込む姿を見て、僕は一瞬でいつもの自分に戻った。

「！ごめん！」

自分の腕から解放すると共に人ひとりの体温を失った筈なのに、僕の体は恥ずかしさで異常な程体温が上がっている。

「あ、あの、咲……」

何か弁明したいのに、次の言葉が出てこない。もう言い訳ができないことがわかっていているのだ。

「……」

咲は何も言わずに落とした鞆を拾い、汚れを静かにはたと僕に背中を向けたまま歩き出した。肩がまだ少し震えている。

泣いている？

違う、僕が泣かせたんだ。

「咲。」

僕はもう一度だけ咲の名前を呼んだ。勿論咲が振り返ることはなかった。肩を震わせながら、時折咳き込みながら、ただ真っ直ぐに咲は進んでいく。

「くそっ！」カン！カラカラン……

自分が情けなくて思わず足下にある空き缶を蹴り飛ばした。最初は勢いよく飛んだものの、すぐに情けない音になって動きが止まった。

空き缶を蹴るなんて、格好悪い人のすることだと思っていた。自分がまさか衝動的にになってしまうなんて。

「格好悪っ。」

僕は空を見上げて呟いた。小道から見える空はとても狭くて、さつきまで二人で居た寺の上に広がっている空と随分違う。空だけじ

やない。耳から入ってくる雑音も、排気ガスの匂いも、足の裏に感じる地面の感触も、全てが違う。

それもそうだ。ここは都会なのだ。沢山の人が毎日すれ違い、交通手段にも困ることはなく、欲しい物は大抵買うことができる。そして僕の家は特に生活に困っていない。親が仕事で家を不在にすることが昔から多かったことも、今はもう何とも思わない。

今は、咲と一緒にいたい。

本当は、僕らが兄弟かなんてどうでもよくなってきている感情が芽生え始めていることを否定できない。でも、このまま何となくの流れで咲と居続けることが幸せになるとも思えない。

僕はどうすればいいのだろうか？

自分が人間関係で、しかも恋愛のことで、こんなに悩む日が訪れるとは思わなかった。

傍にいてくれれば、それだけで幸せなんて感情が本当に存在するなんて知らなかった。

都会で、ほとんど苦勞を知らずに育った僕はかなり情けない男だということが最近どんどん判明してきている。

咲、みつともない僕に正面からぶつかってきてくれる咲が好きだよ。

咲がどうしても嫌ならもう兄弟かなんて調べなくていい。

ただ僕の傍にいて欲しい。



## 十五 梅茶

「今朝のニューズ観た？」

「観た観た！すごいよね。」

「今日って雨降らないよね？」

「やる気があれば結構なんでも出来るんじゃないかと思えるよね。」

「昨日の帰りさあ、」

ゴンツ

いつの日かと同じように寝不足な僕は壁に頭をぶつけた後、何事もなかったかのように後ろの席に座る。受講者が多いこの授業は色々なタイプの人がいて、耳から入ってくる話題もさまざま。だけど今日聞こえてくる話の大部分はほとんど同じ内容だった。

テレビをほとんど見ない僕が理解できないのはいつものことで、気にすることもなく睡眠確保への体勢に入る。一人暮らしたらきっと休んでいたんだろうな、なんて下らないことを考えながら一瞬で眠りの世界へと入り込んでいく。

「でも今の時代じゃあそこまでのし上がれないよねえ。」

「昨日のドラマさあ、」

「あの人っていつも一番前にいる一条君？」

「あ、プリント忘れた。」

夢へと落ちていく時、誰かが僕のことを話していることに気が付いた。でも、今更他人の目なんか気にならない。

あつけないものだ。『優等生』は毎日の努力が必要なのに、不真面目になることはたったの一瞬でなれる。でも、その一瞬で今までの自分から脱出することが出来た。

勿論、咲のおかげで。

今まで経験したことのないことがあると動揺してばかりだけど、少しずつ成長していると思うんだ。だから、咲もこのままじゃ駄目なんじゃないかな？

「今日も絶好調に寝てたね。」

お昼、学食で薫と向かいの席に座ってフライ定食をいつもよりも遅いスピードで消費していく。列が長くないという理由で選んだメニューがやけに胃に重く感じる。

それもそうだ。揚げものだから。

「僕は一体何しているんだろうなあ。」

「大倉さんのことでまだ悩んでる？」

薫の不意な質問に、箸でつかんでいたフライをキャベツの千切りの上に落としてしまった。それと同時にパン粉が僕の服へといくつが飛んできた。

「あ、ごめん。凶星？」

薫。

君は結構思い切って突っ込んでくるタイプだな。

「いや、それは・・・」

違う、と言い掛けて僕は言葉を濁した。咲の存在を知らない薫に違うと否定しても嘘っぽくなってしまいそうで、かと言って咲のことを話す気にはまだなれなかった。

心のどこかでまだ全てを打ち明けることを恐れている僕が居る。

「気を悪くしたらごめん。何も言わなくていいから。」

そう言っただセルフの水をおかわりしに席を立った薫の背中を三秒見つめ、キャベツの上ののっかっているフライをもう一度口に運び始める。やっぱり胃に重くのしかかるフライを諦めずに消費していると、戻ってきた薫が今朝のワイドショーで特集されていたというどこかの会社の社長について話し始めた。朝の教室で耳に入ってきた話題の大部分を占めていた人のことだろう。

「まだ学歴に厳しい世代なのに、すごいよね。」

完食までにえらく時間が掛かった僕に嫌な顔一つせずに薫が熱弁してくれた。話好きが発覚した薫にとっては何も苦ではなかったのかも知れないけど、とりあえず感謝したい。

その夜、僕は静枝さんの居る離れを訪れた。昨日の今日、どんな顔をして咲に会えばいいのかわからなかったけど、あのまま疎遠になつてしまふのも嫌だった。

「もう眠つてしまいましたよ。」

落胆しながらもどこかホツとした気分にもなつた僕に静枝さんがお茶を淹れてくれた。梅茶のいい香りが身体にすごく染み入って、変な緊張感に縛られていた僕をリラックスさせた。

「伝言があるなら、明日の朝伝えておきますよ。」

昔から変わらない穏やかさで静枝さんがそう言ってくれる。

「うっん、直接話したいだけだから。」

驚く程素直に出てきた言葉に、恥ずかしさはなかった。

「そうですか。」

過剰でなく、いつも通りの会話をするように反応した静枝さんは心なしか嬉しさを感じているように見える。

「いつも何を話しているの？」

お茶をすすろうと思ったが、湯吞が熱くてすぐに机の上に置き戻した。そんな僕とは対照的に静枝さんは美味しそうにお茶をすすっている。いつも家事をこなしているので指が丈夫になってこれぐらの熱さは何ともないのだとう。

「特別なことは何も話していませんよ。今日は客が多かったとか、新メニューを発売前に試飲できたとか、話しやすい子が居るとか、そんな内容ですよ。」

早々と静枝さんが一杯目のお茶を飲み終えて、急須からまた新しいお茶を注いでいる。僕はまだ熱くて飲めていない。

と、言うより軽くシヨックをうけてフリーズしてしまっていた。

“話しやすい子が居る”

僕以外にも気軽に話せる人が居るのだということが僕を落胆させた。咲は母親が死んで頼る場所がなく、仕方なくここに来る羽目になったと言っていた。だから、咲を救うことが出来るのは自分しか

居ないと思っていたのに。

でも、話しやすい人が居るなら、バイトが満喫出来ているなら、僕が居る意味は？僕が居る価値は？

親父の子どもかどうか調べるといふ本来の目的が頭からすっかり消え去ってしまったこの瞬間、僕の頭の中にはネガティブな考えばかりがぐるぐると回っていた。

「真一さんのこともよく話しますよ。すごく楽しそうに。」

単純なことに、静枝さんのこの一言で一気に暗い気持ちが吹き飛ばされた。惹かれている女の子に自分のことを、しかも楽しそうにだなんて言われたら嬉しいに決まっている。

「真一さんも咲ちゃんが来てから楽しくなったんじゃないですか？」  
ハツとして顔を上げると静枝さんと目がバツチリと合った。怒っているでもなく、悲しんでいるでもなく、ただただ優しい表情の静枝さんと顔を合わせることは何の緊張感も感じず、不思議と僕の心を穏やかにさせてくれる。

「そう、かも。」

やっと持てる程度の熱さになった湯呑の梅茶を一口飲んで、僕はポツリと呟くように言った。咲が来た当初は腹が立ってばかりだったが、今は素の自分を出せる相手となっている。

「いい顔付きになってきましたね。」

「え？」

二杯目を飲み終えた静枝さんが続けて言う。

「上手く説明できないですけど、表情が随分柔らかくなりましたよ。」

自分では気付いていなかったことを指摘され、僕はどう反応していいのかわからずに黙り込んでしまった。

「咲ちゃんも来た頃に比べると、毎日が楽しそう。ここ二日を除いては。」

僕らのやり取りを把握しているかのような言い方に思わずドキリとするも、咲が素直に甘えることが出来ない性格ということを知っ

ている僕は静枝さんがただ何かを察しているだけであるという考えに行き着いた。

きつとその考えは間違っていない。

「きつと今の咲ちゃんには真一さんが全てなんでしようね。」

静枝さんが何を意味して、何を考えながら発言したかはわからなかった。

「だけど、このままではいけない。楽しそうでないここ二日を三日に延ばしてはいけない、ということを理解するとずしりと僕にプレッシャーがかかった。」

「そこまで大袈裟じゃないと思うよ。」

僕が咲の全てではないけれど、少なくとも今は僕のせいで元気がないのだから責任をとらないといけない。

そう意気込んで僕は残りの梅茶を一気に飲み干した。

## 十六 男性A

薫が食堂で話してくれたすごい人とは、十代で家を飛び出して暴力団に入るも抗争の関係でアメリカに高跳びし、実力主義の世界に感化され大学で経済学の勉学に励んだ人のことだった。何がすごいって授業料やらビザの関係うんぬんで何と生徒でもないのに授業を受講。何食わぬ顔で真面目に受講していた為疑われることなく三年間過ごすも、喧嘩で警察のお世話になったことからばれてしまい日本に強制帰還。勿論、有罪である。きつちりと服役をこなした後、またもやすごいことに働きながら大学に通い、今度は日本の経済学をしつかりと学ぶ。アメリカの経済学も交えて会社を立ち上げたのが三十代に入つてすぐ。そして約十年で有数の企業にのしあがったという社長がこの日本に存在するらしい。

何度もしつこいけど。確かにすごい。

薫が一気に話すものだからとところどころ曖昧だが、朝に皆が話題にしていた理由として納得出来る為、おそらく合っていると思う。

さて、何故僕が今この話を思い出したかという点、つい今しがた僕がある大きな会社へと向かっていているからだ。さつきぶつかった人が少し日本人離れた雰囲気があつて、さらにその時に相手が落とされた携帯電話を今居る場所まで持って来て欲しいと頼まれたのが少し離れた場所に建っている有名なビルなのだ。

相手は自分のことを社長だなんて一言も言っていないが、ぶつかった時間と今いる場所を考えれば車で移動したのだと容易に計算できる。つまりはそれなりの稼ぎがあるのだろう、と電車の中で揺られながら考えたところ薫の話を思い出した次第である。

この出会いは偶然だったのか、必然だったのかなんて考えは全く浮かばなかった。

「Thank you! 本当に助かったよ。」

指定されたビルの中にある企業のロビーに着くなり、さつきぶつかった人が見た目通りの日本人離れした流暢な英語リッチでお礼を言いながら歩み寄ってきた。色黒な肌の色が、高い背とがっしりとした体形を更に大きく見せている。

「もう少しして大事な business の電話が入るんだ。ぶつかったのが君みたいな親切な人で助かったよ、hahaha!」

特に大笑いすることでもない気がするのだが、その人は大きなジエスチャーを交えながら感動すると共に最後は腹の底から笑いだした。

絶対にアメリカ、少なくとも海外には行っていたな。と、瞬時に思うのはきつと僕だけではない筈だ。

「あ、じゃあ僕はここで・・・」

「待って、oh, sorry!」

注目を浴びることが嫌いな僕はその場からすぐに退散しようとしたがその男に呼び止められた。と、同時に僕が今しがた受け渡した電話からコールが鳴った。

「Hello!」

僕がそこに居ないかのように、そしてさっきの何かに大笑いしていた時とは打って変わって真剣な表情で難しい話を進めていく。

これが大人なのか。

いつもきりつとしている親父が書齋で僕につつませたように、まるでスイッチが本当に存在するかのようになり、変化の瞬間を見てしまった僕は自分の優等生モードが全然大したものではなかったことに気が付いた。常に気を張り巡らせ、一人で居る時しか落ち着いた気持ちになれなかったあの頃は何も知らず、ただ自分はすごいだけ思っていた。

でも、所詮は偽者。何とつまらない人生を過ごしていたのだろう。

「何かお礼をさせてくれ。」

電話を切るなり少年のような笑顔で僕にそう語りかける男を思わず見つめてしまう。

「少年？」

「あ、いや。お礼なんていいです。当然のことをしただけなので。」  
「Wow！」

所々英語が入る喋り方には違和感が多少ありつつも頭にはこないが、今のオーバリアクションには思わず嫌な気分になった。

「馬鹿にします？」

「いやいや、そんなつもりはないよ。ただ腹の底で何か企んでいる奴ばかりとbusinessをしているから、ついね。気を悪くしたら済まない。」

真つ直ぐと僕の目を見ながら謝るその瞳には嘘一つ感じられず、ただ威圧されるだけである。

「でも、お礼はさせてくれ。今の電話を取りそびれていたら大変なことになっていたかもしれないんだ。大袈裟じゃなく、社員の首を切らずにも済んだよ。」

「そこまで大きな契約だったんですか？コーヒー豆をまとめ買いすることが。」

「Great！聞き取れていたんだね。でも、あくまでもbusiness nameで正確にはコーヒー豆ではないのだよ。何かは教えられないがね。」

business name、つまりはばれたくないことを暗号化した言葉という意味だろうか。柔らかな笑顔の下に、重要なことは言えない鋭さを備えている顔付きからは大物感が漂っている。

「でも、今何が欲しいとか、何かをして欲しいことがあるとか、そういうのは無いんです。」

その言葉に嘘は無かった。昔から望めば大抵のものは手に入った自分一人の力で獲得した全国模試で総合百位以内も、大学への学内推薦も、優等生という建前も・・・と、まあ今振り返ればつまらないことだらけだけれども。また、それと同時に何かを欲しがってはいけないという考えの元で過ごしてきた僕にとってそれがいつしか当たり前になり、物欲は全くと言う程なくなってしまったのだ。

「だから結構です。」

「じゃあ何故幸せそうな顔をしない？」

思ってもいない言葉に、僕は啞然としてしまう。鋭い瞳でいつも簡単に僕の心を見抜いてしまっているようだ。

「不幸そうな顔をしているってことですか？」

少しだけ反応を考えた後、僕はそう質問をした。怒りも入り混じったような、そんな表情と声になっていただろう。

「No！そうじゃない。ただ、欲しいものが無いということは欲しいものが全て手に入っているということかと思っただが、そうは見えない。何か悩み事があるということかな？」

核心をズバリと突かれた僕は一気に体中の力が抜けた気がした。

この男にはきつと敵わない。本能でそう感じ取った。

「何で、わかるんですか？」

まるでいたずらが見抜かれて失敗した子どものように、不服そうな顔つきで僕は男に質問してみた。

「半分は賭けだったよ。君が姑息で、平気で嘘を吐くことができるのだったら騙されただろうけどね。」

ニツコリと、嫌味無く説明してくれる男には何故だか腹が立たない。そんな不思議な雰囲気を持っている。

「じゃあ、あなたと話したいです。」

ふいに口をついて出た言葉は自分でも理解出来ず、キョトンとしている僕とその男の周りだけ時間が止まってしまった。

「あ、変な意味じゃなくて。」

一分は経っていたと思う。自分の言ったことがゲイ発言に聞こえるのではないかと思うと一気に恥ずかしさが込み上がってきた。

「いや、その、何か大物だっと思って、じゃなくて、いや、違わなくて、ただ、何か凄そうで、興味が、こう、」

話せば話すほど自分が何を言っているのかわからなくなり、底なしの泥沼へとどんどんはまっていくようだ。そんな僕にまたもや男は嫌味なくニツコリと微笑み、あっさりとかう言い放った。

「いいよ。」

大人の雰囲気はまだ少年のあどけなさを残すその男の一言に、動揺していた僕はスーツと落ち着き始める。

「今日は都合が悪いから、明日また来てもらってもいいかな？夜なら大丈夫だと思うから。」

スーツのポケットから取り出した手帳をパラパラとめくり、さつさと予定を決めてしまう様子に無駄な動きが微塵も感じられず、スマートさが伺える。

「社長！カンファレンスルームに急いで下さい！」

突然の思ってもいない声に、僕は驚いてビクツと肩を震わせる。

エレベーターから出てきたのだろうか、カツカツとヒールの音を響かせながら猛スピードで走ってくる綺麗な女の人の威圧感というか、険しい顔に更に僕はまたビクツとしてしまう。

「まだ真一と喋っている途中なんだよ。それにまだ時間あるじゃないか。」

「馬鹿言わないで下さい！あと五分しかないじゃないですか！」

「やれやれ、日本人は時間にうるさいな。」

「うるさいのは社長です！いつもああ言えばこう言うんだから。ほら、行きますよ。」

秘書なのだろうか、その女の人は華奢な体からは想像できないような力でガシッと男の腕を掴むと、少しも落ちないスピードでまたエレベーターの方へと引つ張っていく。

「あ、あの、」

唾然とした僕が我にかえった頃、エレベーターに乗り込む社長が「またね。」というような笑顔で手をひらひらと振り、あつという間に視界から消えてしまった。

そこにポツンと残された僕に忙しいんだな、という感想が残りはしなかった。

「いいって一言も言ってない。」

ただそれだけ思った。

他には何も、本当に何も思わなかった。

## 十七 止まらない

どうして今日はいつも起こらないようなことが続けて起こるのか。携帯電話を届けたビルから出て駅に向かおうと右に向かい始めたその瞬間、ものすごく見覚えのある顔が視界に入った。

「咲。」

咲が左手に持っている半分に折り曲げられた数枚の紙はそれなりにしおれており、何度も鞆から出して広げたり畳まれたりした跡が残っている。二日ぶりに会えたというのにどうでもいいようにことに目がいつてしまう僕は何とつまらない人間なのだろう。

「彼氏？」

全く視界に入っていないなかった空間から、思ってもいない言葉が聞こえてきたことに驚いた僕は更にもう一度驚くことになる。

「違うわよ。」

咲が赤い顔して、隣に立っている男に慌てて否定している。

ズキン

僕の胸が自分の意志と反して勝手に痛み始める。

誰だ？この男は。二十代後半だろうか、僕よりも少し年上の雰囲気がある。顔は整っていて、男の僕が見ても格好いいと思う。

「！」

ふいにその男が視線を僕に移すものだから、僕の視線とぶつかった。僕は咄嗟とつさにずらしてしまった視線をどこに向ければよいのかもわからずに、とりあえず男の足元から顔へと動かすとまたもや目が合った。

「睨にらまないでよ。ただの職場仲間だから。」

聞いてもいないことなのに、そう教えてくれたことにより変に強張った僕の体が少しだけリラックスする。

「今日の予定はもう終わりだし、ここで解散しよっか。」

「え？あの、」

「また明日ね。じゃ、失礼します。」

丁寧なことに僕にまでキチンと挨拶をした後、咲と僕をその空間に置き去りにしてさっさと行ってしまった彼の背中が、つい先程ピルの中で見た男性の姿と重なった。きつと彼も仕事が出来る人間なのだと思感で思った。

「何してんのよ、こんなところで。」

気まずそうに咲が言う。前の様に強い口調ではあるものの、最初の頃のような棘とげはなくなっている気がする。

「たまたま、野暮用で。咲こそ、何で・・・こんな場所に？」

僕は“何で職場の男と二人きりでこんな場所に？”と口からふいに出そうになった言葉を一旦止め、咲に聞かれたことと同じ内容の質問を返した。どうも僕は咲相手だと頭で考えるより本能が先に出てしまっらしい。それだけ素が出せているということなのだろう。

「まあ、色々。」

咲も僕と同様に短い返事で片付けた。僕達の間は無言が広がる。

「私も、もう行くわね。」

「どこに？」

「どこでもいいじゃない。」

回れ右をして今にも歩き出そうとする咲を慌てて止める僕に、容赦ない強気な発言が降りかかる。

「今からバイト？それなら僕も行って終わるのを待ってる。」

「何で？」

咲が驚いた表情で僕を見据える。久々に強い咲の視線に貫かれて、思わず思考が停止してしまいそうになる。

「話がしたいから。」

何をどう話すかなんて、シナリオなんて全然ない。でも、このままじゃいけないということだけはずっと思っていたことなのでこのまま咲の背中まで見送るわけにはいかないのだ。

「.....」

咲は何も言わない。きつと、咲もわかっているのだ。

このままじゃいけないことを。  
現実から逃げ続けることは不可能だということ。

「わかっているのよ、今の生活をずっと続けることが出来ないことくらい。」

目標地点を定めるでもなく、とりあえず肩を並べて歩き始めてすぐ咲がそう切り出した。

「でも、初めてのことだらけで楽しくて、このまま人生が終わってしまえばいいって思う気持ちもある。」

信号待ちで歩くことを強制的に一時停止することになっても、咲の話は止まらなかった。

「ずっと憧れてた。かわいい制服を着て働いたり、下らないことばっかり話して時間を潰したり、目的もなく街中を歩いたり。」

普通の学生生活を送っていたら体験できそうなことを“憧れ”と言う咲の気持ちを僕は複雑な気持ちで聞いていた。普通の学生生活を送ることが出来なかった根底には、婚外子であることが影響しているに違いなかったからだ。

「今もね、新しくオープンする店舗の内装を決めていって言われて店を回って来たの。さっきの人が新店舗の店長で、そこに私が正社員として雇われることに決まったから。ライトとか小物とか、他の店の視察も兼ねてウロウロしたの。一から作り上げる空間に参加できるなんて、本当に楽しい。」

信号が青になって進み始めると共に咲の話し方が弾むように明るくなってきた。そんな咲とは対照に、僕にはイライラした気持ちが込み上げてくる。

「学校の行事も準備の時から休みがちだったから、こんな風にワクワクすることって今までなかった。」

「隣には格好良い男の人が居たしね？」

途切れることのなかった咲の話が、僕のこの一言で途切れた。嬉しさが溢れていた表情が一瞬にして険しくなったことを空気だけで

悟ることができて、僕の口はそこで止まらなかった。

「背も高いし、仕事もできそうだし、そんな男と並べて歩いて良かったな。同じ店舗で働けるなんて、これから仕事が楽しみだろ？」  
最悪だ。

いくら咲が自分の知らない男と二人で歩いていたらって、その嫉妬心をぶつけてしまうなんて。今の自分では到底敵いそうにない大人を続けて目の当たりにすることで自分の幼さを感じたばかりなのに、尚更子どものようなことをしてどうするのか。

一体、僕は何がしたいんだろう？

「何よっ。」

どこかで冷静に嫉妬心を認めていた筈なのに、咲の泣きそうなの、怒りを含んだ一言でハッとさせられ、僕は慌てて振り向いた。

案の定、咲の表情から泣きたさと怒りが窺える。

「ごめん。」

僕は素直に謝った。他に何を言えばいいのかもわからない。

一体、僕はどうしたいんだろう？

渡り終わった横断歩道から数歩しか離れていない歩道、すれ違ふ人はそんな僕らに見向きもせず、点滅し始めた青信号に慌てて走り過ぎていく。

「あんたにはわからないわよ。例え演じていたのだとしても、普通に学校に通えていたんだから。」

さっきの普通の学生生活を憧れていると言った台詞と共に、咲と出会って間もない頃を思い出した。僕の大学に行きたいと言った時のことを。授業を楽しそうに受けていた時のことを。

「下らないことでも、私には……」

咲の言葉が途中で消えた。僕が消したのだ。いつの日かと同じように、抱きしめることによって。

「ちよっどー！」

あの時と違うのは、僕が無意識にじゃなく自分の意志で抱きしめたこと。そして後ろからではなく、前から抱きよせていること。お

まげに赤信号で歩くのを止められた人々が近くに居ることだ。

「ごめん。咲と喧嘩したい訳じゃないんだ。怒らせたいわけでも、悲しませたい訳でも。」

抵抗のない咲は、前と違って震えたりしなかった。ただ困惑はしているらしく、僕の腕を振り払うことも、何か言葉を発するでもなく呆然と僕の腕の中に包まれている。

僕らの周りに人が増えていく。青信号になるまでのせいせいー、二分程度なのにこんなにも人が集まってしまうこの都会。「撮影？」「カメラどこ？」なんて会話も聞こえてくる。

「馬鹿。」

やっと発した一言に、思わず腕と気が緩んだ隙を見逃さずに咲は僕の腕を軽く振り払い、そして寺に行った時の様に手を握った。

「行くわよ。」

まだ好奇心の眼差しを向ける人々を完全に無視して、真っ赤な顔した咲が僕を引きずるように歩き始める。

僕は完全にどうかしている。恥ずかしさよりも、咲への愛おしさの方が勝っている。どんな理由であれ、握られているこの手を、その手から伝わってくる咲の体温を離したくない。

他に何もいらなくなるといふ恋を知ってしまった十九歳の終わり。最初で最後の恋になると思っていた僕はまだまだ幼かった。

今はようやくやく穏やかに思い出せるよ。

## 十八 意地っ張りはいつまで続く

「馬鹿。」

人気ひとけのなくなった道端で僕の手を離すその瞬間、咲はさっきと同じ言葉を僕に浴びせた。

「自分でも、そう思う。」

否定することもなく、苦笑いをしながら僕は手を自分の体へと戻した。咲の体温を覚えている手はまだ少し汗ばんでいる。

「何で、あんなことっ。」

僕に背を向けて咲が怒っているような素振りそぶりを見せる。でも、僕はもう気付いてしまっている。

「わからない？」

「わからないわよっ。」

僕の方を向くことなく、咲が半分叫ぶように言い捨てる。咲の視線が下を向いているものだから、まるで何の罪もない地面を怒っているようだと言中越しに聞きながらそう思ってしまった。

「嘘だ。」

僕のその一言で咲の視線が少しだけ上がった。でも、やっぱり僕の方を向いてはくれない。

「何がよ。」

数秒程間を置いて、咲がいつものような強気を張り詰めた状態で言葉を返してくる。精一杯の、咲の見栄だ。

「わからないなら言うよ。」

「止めて！」

咲が自分の両手で耳を塞いで、体を固く強張らせた。小さい咲が、もつと小さく見える。

「わかってるじゃないか。」

僕はまた苦笑いしながら呟いた。この呟きが咲の両手を通過しないことなどわかっている。それでも勝手に口から出てしまうのだから

らどつしよつもない。

徐々に変わってゆく空と共に、僕達の居る場所も幻想的な色に染まり始めてゆく。不謹慎かもしれないが、可南子と別れた日のことを思い出してしまった。あの時はたった一人の女の子の為にみつともなく走り続けた。そしてもつと幻想的な色に染まった時は可南子の口から終わりを告げられた。でも、それは僕達の新しい関係の始まりでもあった。“友達”という、本当は簡単ではない関係の始まり。

そういえば、可南子がふいに口ずさんでいた歌に「終わりは始まり」というフレーズがあつたなあ。可南子の好きな歌手グループで、特に浪人時代テストの終わった日に聞いていたと言っていた。手ごたえがあつてもなくても、明日からまた頑張ろうと思えるように何度も何度も聞いていたと。

思えば、僕が知つた可南子が具体的に好きなものと言えばそれくらいかもしれない。スイーツは全般好きだけど、特に何が一番好きか知らない。読書も好きだけど、好きな作家を聞いたことがない。

ああ、僕は本当にひどい彼氏だったんだな、なんて咲を目の前にして思っていることが一番ひどいのもかもしれない。紛れもなく咲が好きなのに、他の女の子のことを考えているなんて。でも、心のどこかで吹っ切れていない自分がいることを否定できないし、しない。事実だから。

「はつくしゅっ」

ずっと同じ体勢で固まっていた咲が大きなくしゃみをした。

最近気温が下がり始めた朝夕、今日も例外でなく寒くなり始めていた。幻想的な色から闇の色へと変わっていくこの時間に人気もない道端、くしゃみが出るのも無理はない。

「帰ろつよ。」

くしゃみのはずみで固く塞いでいた手が耳からずれた瞬間を見逃さず、同じくくしゃみが出そうなほど体が冷えてきている僕は簡潔に言った。

ちやんと聞こえていたらしい。銅像のように固まっていた咲の肩が震え始めた。手はまた耳の横に移動していたけど、もはや何の意味も成していないことをやっと認めた咲はようやくその両手を下ろした。

「素直に泣けばいいのに。そんなに泣き顔見せるの、嫌？」

この一言で鼻をすすり始める咲の口がようやくやく開き始めた。

「嫌よ。」

「何で？」

久々とも思える咲の声に、僕はすぐに反応した。さっきも言ったように、勝手に口から出てしまうのだからどうしようもない。

「何ででも。」

咲らしい、強がりな発言。怒っているように見せて隠していた戸惑いを僕はもうわかってしまっている。ゆっくりと近づいて、咲を振り向かせた。咲ももう抵抗することなく困惑した表情を隠したりはしなかった。

潤む瞳に、濡れた頬。僕の理性をふつとばすには充分だった。

「・・・ひつく・・・」

僕の腕の中で抵抗することなく嗚咽する咲。

「どうすればいいのかわからないのは咲だけじゃない。僕だって・・・」

鼻の奥がツンとしてきた僕はそれ以上何も言えなくなった。見知らぬ道端でただ泣き続ける咲を抱きしめる以外の術が何も思いつかない。そんな情けなさを闇の中へと消したい気持ちで一杯になった。

それなりに時間が経った頃、いい加減に泣き疲れた咲と僕は手をつなぎながら取り敢えず駅を目指した。無言で、二人共ゆっくりと自分の足を何とか動かす。それは駅に着くまでずっと続いた。咲が切符を買つ為に手を離してから、体もある程度の距離を保ちながら電車に乗り、僕の家最寄り駅のホームに降り立った。

「じゃあ、ごいど。」

改札口を通る手前で、咲がそう言って足早になった。

「好きだ。」

帰りのラッシュ時、僕達が降りた駅にもそれなりの人が居る。そんな人ごみにあっさりと消えてしまうような小声の僕の告白が聞こえたのか、咲が改札口を通過して走り始め、あっという間に見えなくなってしまうた。

それから僕もまたゆっくりと歩き出す。これからどうすればよいのかを考えながらのろのろと歩くも、答えは全然出てこない。ただ一つはつきりとしていることは

「僕は咲が好きだ。」

それだけは確かだ。決して駄目だと言われても、間違っていると罵られても、もうどうしようもなくはつきりとしている。

言葉にすると急激に胸が苦しくなっ僕の頬を一筋だけ涙が流れた。

## 十九 女性A

「はあはあ・・・ごほっごほっ」

駅からの帰り道、ものすごい咳と動悸に耐え切れずに足を止めた。すっかりと暗くなつてしまったこの時間、星も月も全て雲に覆われている今日はただ街灯の明かりだけが何とか咲の姿を存在させている。

「ぜえ、ぜえ」

全力疾走するなんて生まれて初めてではないだろうか。「好きだ。」という言葉が聞こえて体が反射的に動いた。どうしようもなく恥ずかしくなつて、その場から逃げだすようにもう見慣れてしまった道路を駆け抜けた。

「うっ」

止まらない動悸に加え、違う痛みも伴つて視界が霞んだ。

どうしようもなく嬉しかった。

この歳になつて初恋をしてしまうなんて。

昔から素直じゃない上に思ったことをハッキリと言つてしまう性格が災いしてぶつかることが多々あった。学校も休みがちな上に元々人見知りが激しい性格も手伝つて教室ではほとんど一人だった。おせっかいな人もいたけど、結局性格が合わなくてまた一人に戻つたり、クラス替えで離れてそのままになつてしまつたり、失いたくないと思う程大切な人が母親以外に今まで存在したことがなかった。それは恋愛面でも同じで、ドキドキしたり誰かを想つて泣いたりするなんてことは一度もなかった。

「・・・っ・・・」

一度引つ込んだ筈の涙がまたこぼれ始める。

母親が死んでからもう大切な人が現れるなんてどうやったら想像

することが出来ただろう。父親の可能性がある一条誠の元に来る時  
もさほど期待しなかった。門の前で初めて真一に会った時にも。

「はあー、げほっ、げほっ」

相変わらず止まらない動悸。あまりにもひどい咳も出始めて思わ  
ずその場につずくまった。

「ぜえ、ぜえ」

苦しい。

それは感情からくる痛みだけでなく、普通の呼吸が出来ないこと  
からくる苦しさの方が強かった。

本当にやばいかもしれない。私このままここで死んでしまうのだ  
ろうか？母親が死んでまだそんなに経っていないのに、もう後を追  
ってしまうのだろうか？

嫌だ。そんなの嫌だ。死にたくない、こんなところで。

私はまだ生きたい。

「・・・っ・・・」

それなのに体が言うことを聞いてくれない。涙も次から次にこぼ  
れてくる。

そうか、これは今までの罰なんだ。

死を覚悟した咲にそんな考えが浮かび上がった。今までさつさと  
死んでもいいと思っていた。母親より長生きできればそれでいいと。  
元々体の弱い母親が母子家庭ということ人で一倍苦勞して育ててく  
れていたのにそんなことを思っていたから罰があたったんだ。

だって好きな人なんかいなかったのだから仕方ないなんて言い訳  
もできない。好きになろうと努力もしなかったから。

「ううっ・・・」

後悔の気持ちが一気に押し寄せてきた。もつと命の尊さを感じて  
生きればよかった。もつと素直になっただけよかった。もつと沢  
山話しておけばよかった。もつと一緒に時間を過ごせば良かった。

好きと言っておけばよかった。

気が付けば苦しいということよりも真一のことを考えている自分

に咲は驚いた。どうやら思っているよりもずっと真一のことを好きになっっているらしい。

ねえ、お母さん。お母さんは死ぬ間際何を考えていた？誰を想っていたの？

「ちよつと、大丈夫？」

ふいに辺りが明るくなったと思うと誰かが車から降りて声を掛けてきてくれた。咲と同じくらいか、少し年上くらいの女性。

「今救急車呼ぶから。しっかり！」

そう言っつてその女性が手に持っていた携帯電話のボタンを押し始めた時、咲は慌ててその電話をつかんだ。

「呼ばないで・・・はあつ、はあつ」

必死な咲の形相にその女性は一瞬怯んだが、すぐに冷静な顔つきに戻った。

「何を言っているの、そんなに苦しそうにしているのに。」

その女性の言うことももともともである。ただどこだけは咲もゆずれまいと食い下がる。

「へい・きよ・・・ごほつ・・・少し、横に・・・なれ・ば・・・ごほつ・・・すぐに・・・治る・・・から・・・」

意地だけでそう言っていたのに、不思議とさつきよりも苦しさが落ち着いてきている気がした。呼吸がさつきよりも深く出来る。動悸も少しだけマシになった。

その様子がその女性にも伝わったのか、咲の手を振り払い携帯電話をパタンと閉じた。

「わかったわ。その代わり、家までは送らせてもらうわよ。」

咲に負けじと鋭い瞳を持つその女性の言い方には有無を言わせぬ勢いを感じた。しかし、咲は首を縦に振ることもできない。

だって、あの家は私の家じゃないもの。

「もしかしてあなた家出しているの？」

何の返事もせずに神妙な顔して黙り込んだ咲にそう疑問を抱くのも無理はないだろう。前に住んでいた場所で遅い時間帯に外に居る

時、警察官に女子高生と間違われて声を掛けられることも何度かあったくらい咲は幼く見える。

「家も何も、ただの居候だし。」

消え入るように小さな声でも言葉にすると咲はやけに空しくなった。すっかりと落ちて着いた自分の体を嬉しく感じない。

「はあー、乗りなさい。」

女性は呆れたような溜息をついた後、その女性は咲を車に乗るよう促した。静枝さんの居る場所に今日は戻りたくないと思いがながらも、諦めたようにその女性の言うことを聞いて後ろの席に乗り込んだ。他にどうすれば良いのか思い付かないのだ。

逃げてばかりじゃ駄目なことは自分でわかっていても、心が追い付かない。そんな弱さを自覚するとまた泣けてきた。

「・・・あの？」

車に乗って五分は経った頃だろうか、咲は自分の寝泊りしているところを聞かれていないことに気が付いた。てっきり静枝さんの元に送っていかれるとばかり思っていたのに、その女性は咲に何も聞かずに黙ってハンドルを握っている。気がつけば道も自分が知らない場所だ。

「帰りたくないんでしょ？」

前を向いたまま、少し冷たく言い放つ女性の言葉に咲は思わず黙り込む。

それからまた五分程経った頃、女性が運転する車はある建物の駐車場へと入り始めた。ほとんど泊まっていないガラガラの駐車場で素早く車を駐車すると

「降りて。」

エンジンを止めながら簡単にそう言われると、その女性が無言でカツカツとヒール音を響かせて歩き始めたので、咲も慌てて後ろを付いていく。

「・・・あの？」

先程と同じ言葉を咲が投げかけた頃、駐車場の端にある階段へと辿り着き、その女性は歩く時と変わらないスピードでカツカツと階段を一段ずつ登っていく。

「普通の人には縁がないところでしょうね。」

それなりに歴史を感じる階段に、辿り着いたドア。半分が曇りガラスのその仕切りを女性は何の躊躇をすることもなく丸いドアノブを握り、開けた。全然知らない人についてきた咲は何の不安も感じずにそのまま女性の後ろについてその部屋に入った。

もしかしたら悪い人なのかも？という考えが生じなかったのは何も考えたくなかったからではない。何も考えられないくらい体が疲労していたのだ。

初めての気持ちに、告白、そして全力疾走。咲の思考回路を止めるには充分であった。

後悔することにならなくて本当によかった、と思うのはもう少し時間が経ってからのことである。

## 二十 ミスター出現

「お、久しぶりだねえ。」

ドアが開いたことに反応して部屋の奥の窓を開けて煙草をふかしていた男の人が振り向いた。四十歳を過ぎたくらいだろうか、中途半端に伸びた髪はボサボサで、剃り残したような不精髭ぶしょうひげがうっすらとしているものどこか上品な風格が漂っている。

その為か語尾の伸びがある口調も特に気にならない。

「若くて可愛いゲストだねえ。」

「この子は客じゃないですよ、ミスター。道端で拾ってきたんです。」

しれつと言った女性の発言に、ミスターと呼ばれたその男性は何が可笑しいのか声を出して笑い、奥の部屋へと消えていった。

「・・・?」

何の訳もわからずに咲はその女性を見た。思えば道も車の中も暗かったこともあって顔をちゃんと見たのがこの時が初めてだった。整った眉にしっかりとしたアイメイク、真っ赤な口紅をしているのにそれに負けない顔。

かなりの美人である。

部屋の中にあるのは机や椅子や棚やファイルなどの筆記用具、そしてソファといった特に珍しくないものばかりだが、ごちゃごちゃとしたまとまりのなさが知らない場所をより強くそう思わせた。

「とりあえず、そこに座って。」

促されるままに、咲は黒いソファにポスッと腰を下ろして背をもたれた。階段やドアに負けない程の歴史を感じる天井に蛍光灯、視界に入ったそれらの景色が少しずつぼんやりとなっていく。

「コーヒーと紅茶、どっちが・・・って、あら。」

その女性が咲の方を見やると、咲は眼を閉じ、何の反応もない。つまり咲はあっという間に眠ってしまっていたのだ。

「コーヒーよろしく。」

ミスターが奥の部屋から持ってきた毛布を咲に掛けながらその女性に頼んだ。

「はい。」

「お、さすがだねえ。」

言われるまでもなく女性が用意していたコーヒーを差し出すと、ミスターは感心しながら笑顔でカップを受け取った。

「やっぱり実の淹れるみのじコーヒーが一番上手い。」

「・・・じゃあ私はやることがあるので。」

一瞬切なそうな表情をした実と呼ばれたその女性は、ミスターの言葉には返事をせずにもたヒールの音を響かせながらミスターが毛布を持ってきた部屋へと入って行った。

その言動にどう反応するでもなく、ミスターは自分の椅子に腰かけ、もう一度コーヒーをすすった。

「うん、やっぱり美味しい。」

穏やかな表情で、ただその一言だけ発した。

カタカタカタ・・・

電気を点けてはいるものの、どこか薄暗い部屋で実は速いテンポでパソコンのキーボードを叩く。

「絶対にどこかで見たことあるのよね。」

そして何かが引つかかる。

小さく独り言をいしながらパソコンの中に入っているデータや机の中の資料を取り出す。

今調べているのは昼間に会った少年のことだ。一回のロビーまで迎えに行った時に社長と一緒に居て、明日あの忙しい社長と一緒に食事をすると言い出した。ビジネスでしか基本的に動かない社長が、結婚もしていない社長が、どうして一人の少年と？やっぱりビジネスのことが絡んでいるのだろうか？

気になると調べずにはいられない実は時折こうしてやってきてこ

の部屋で黙々と調査を始める。朝まで一睡もせずに調べることが特に珍しくない。

最初は綺麗に整頓されていた資料が机の上に散乱されたように広がったと思うと、そこに載っているデータが希望通りのものでないとわかるとまた綺麗にファイルに戻っていく。そしてまた違うファイルから探し出された資料が同じような状態に広がり、まとまっていく。

違う、もっと前・・・？

前の職場の時ではなかったかしら？

声には出さずに頭の中でぐるぐると考えるも、手の動きは少しも遅くならないスピードでパソコンのキーやマウスを動かしている。

「ふう。」

もう何時間と手と頭を緩めずに動かしていた実は背もたれに体を預けた。慣れていることとは言え、一息もつかずに朝を迎えることはさすがに苦しい。さっきは飲まなかったコーヒーを今度は自分に淹れようと思い、片手に毛布を持ってさっきの部屋へと戻っていた。

「がんばるねえ。」

実がドアを開けると同時にミスターの声がした。

「・・・ミスターこそ。」

とつくに寝てしまっていると思って持ってきた毛布を持ったまま実はなんとか返事をした。もう少しで空が明るくなってくるという時間帯、さすがに疲れが隠せない二人の頭の中には懐かしいある光景がフラッシュバックした。

「ミスター、私」

「悪いけど、もう一杯コーヒー淹れてくれないかな。」

書類に目を戻したミスターに言葉を遮られた実は少しそこに立ちすくんでから黙ってコンロの火を点けた。ふと横を見ると、棚から取り出されたコーヒー豆と洗われていないコーヒーカップ置かれて

いる。実がいなくなってから自分で淹れていたからだろうか、おかわりしようとして一度ここに訪れていたらしい。

「・・・バカ。」

実はミスターに向けてか、自分に向けてかわからない一言をポツリと呟いた。

「やっぱり美味しい。」

さっきと同じ笑顔でミスターがそう言うと、今度は「どうも。」という返事をして実はまたパソコンの元へと戻っていった。ミスターと同じブラックコーヒーを飲みながら、社長と調査中の少年のことを思い出していた。社長をロビーまで降りて迎えに行つて・・・

「あつ。」

ある重大なことを思い出した実はまだコーヒーが半分入っているカップを机の端に置き、まだ見ていない資料を漁りだした。少年がもう少し幼い頃、まだ制服を着ていた時に見ていた。と、なんと二年前くらいになる筈だ。

さっきとは違って何個かのファイルの資料が机の上で交ってしまっているながらも、それに構うことなく実は急いで目当ての資料を探し求めた。

「あつた！」

やっと見つけた資料を手に持ち、書いてある文章に目を通し始めた。

「そうよ、一条真一。一条誠の一人息子。やっぱり見たことがあったわ。」

もやもやしていた問題が解決しても、実はまだそこから動かなかった。折角だからとそのままパソコンを、今度はゆっくりと動かしながら朝を迎えた。

この部屋で何回朝日を拝んでも、この眩しさに目が慣れることはないな。

そう思いながらとうとう昇ってきた朝日の光を浴び、実は残りのコーヒーを飲み終えた。



## 二一 モカメモリー

体が痛い。

その感覚に襲われて咲は眼を開けた。年季の入った天井に蛍光灯、見慣れない部屋であることを一瞬で理解した咲は身体を起こした。

「痛っ……。」

ソファに背もたれたまま眠っていたのだ、妥当な感想であろう。

「おはよう。」

ソファの後ろから声がして、咲は振り向いた。徹夜したのか少し疲れた顔の男が机の向こうに居た。

「おはようございます。えっと……ミスター。」

咲は挨拶を返すと共に必死で昨晚の記憶の糸を手繰り寄せ、美人な女の人がミスターと呼んでいたことを思い出した。

「おはようございます。」

咲達の声が聞こえたのか、隣の部屋のドアが開いて美人な女の人がカツカツと近づいてきた。

「実、」

「あなたコーヒー飲める？紅茶の方がいいかしら？」

ミスターの言葉を遮って実が咲に質問をした。咲は少しあっけにとられたように考えてから「紅茶」と一言だけ返した。

「実、」

「おはようございます、ミスター。コーヒー淹れますね。」

またもやミスターの声を遮って実が机の上に置かれていた空のコーヒーカップを取った。

「さすが。」

感心したようにコンロの方へ歩いていく実の背中を眺めながら、ミスターが賛辞の言葉を送った。その二人の関係がイマイチわからない咲はソファで少しボーっとした後、掛かっていた毛布を丁寧に畳んで実の歩いた方へと向かった。

「あ、手伝います。」

慌てて来たつもりだったが、実は既にフィルターに挽いた豆を入れ、ポットには紅茶の葉を入れており、後は沸騰したお湯を注ぐだけという状態であった。

「ミルクとシロップはどうする？」

「あ、じゃあミルクだけ。」

何もすることがないと一瞬で悟った咲はただ実の質問に返事をするだけだった。かと言って引き返すのもどうだろう、と思うとそこから動くことも出来ず、ただ変な沈黙が二人の間に流れた。

「あなた今日はどうするの？」

そんな沈黙を全く気にしていないかのように実がまたもや質問してきた。

「さすがに、帰ります。」

「そう。」

実は特に何かを追及することもなかったので会話が途切れ、またもや沈黙が広がった。

「あの、ありがとうございました。」

沈黙に耐えられなくなった咲がやっとのことで口を開くと同時に、やかんの中の水がすごい音を奏で始めた。どうやら沸騰したらしい。

「高級住宅街はスリや変質者がよく出るのよ。気をつけなさい。」

火を止めた実がお湯を紅茶の葉が入ったポットに注ぎ、蓋を閉めて砂時計をひっくり返した。その後、手際よくコーヒー豆にお湯を注ぎ始めると、いい香りがあつという間にその部屋を支配した。

「それに、体の調子がおかしいみたいだったけど、病院に行かなくて本当に大丈夫だったの？」

フィルターの中のお湯が減るとまたお湯を少し注いでいく、という動作を繰り返している実が咲の方を見ることなくそう心配の声を掛けてくれた。

「あ、はい。」

咲もフィルターの中のお湯を眺めながらそう答えた。

病院

・・・

忘れかけていた感情が一気に湧き出てきた。涙を流す、立ち尽くす、顔を覆う白い布・・・次々と思い出される記憶に、咲は思わずその場にうずくまりそうになった。

「大丈夫？」

咲の顔が曇ったことを察知して、実がそう問いかけた。咲はハッと我に返って頷き、いつの間にかコーヒーと紅茶がのせられていたお盆を持ち上げた。

「モカ？」

辺りに広がっていた香りがお盆を持つことによつて更に強くなり、咲の口からポロっとコーヒーの種類が出た。

「あら、よく知っているわね。」

「あ、私カフェで働いています。」

「それでも香りだけでわかるなんてすごいわね。まあ、独特な香りではあるけども。」

実と並んで話しながらミスターの居る空間へと向かう。

忘れるわけがない。新店舗の雑貨めぐりの時、他の店で飲んだコーヒーがモカだったのだ。真一にバッタリ会う、ほんの少し前に。

「私はこれを飲んだらもう出るけど、あなたはどうする？」

ソファに座つて咲がミルク入りの紅茶を飲み始めると、前のソファでブラックコーヒーを口に運んでいる実がそう切り出してきた。

「あ、電車で帰ります。近くの駅を教えてくださいませんか？」

さすがにこれ以上お世話になるのは気が引けるので、咲は電車ですぐにこれ以上お世話に帰ることにした。仕事までまだ時間があるのでシャワーを浴びたいし、携帯電話を持っていない咲に連絡することも出来ずに心配しているだろう静枝さんを取り敢えず安心させておきたい。

「まだ朝早いから、もう少し温くなってからにしたら？」

「えっ？」

ミスターのその言葉に、咲は少し部屋の中をキョロキョロしてよ

うやく見つけた置時計で時間を確認するとまだ朝の六時であった。そう言えば部屋の空気がまだ冷たいと今更感じ始めた。

「では駅までの道、お願いしますね。」

気がつけば既にコーヒーを飲み終えていた実がソファから立ち上がってさつきコーヒートを淹れた部屋の方へと消え、水を流す音が聞こえ始めた。自分の飲み終えたカップなどを洗っているのだろう。

「あ、あの、迷惑じゃないですか？」

申し訳ないように咲がそう問うと、ミスターは優しく微笑んで「全然。」と返事をした。

「じゃあ、もう行きますね。」

相変わらずカツカツとヒールの音をテンポ良く響かせ、あつという間にドアの向こうへと消えていった。

「相変わらず働き詰めだなあ。」

心配してミスターが溜息を吐くように呟いた。咲がミスターの方を見やると、ミスターは実が出て行ったばかりのドアをじっと眺めていた。疲労感の漂うその表情からは深い気持ちは読み取れないが、ただ心配しているという気持ちだけは伝わってくる。

どう反応すればいいのかわからず、咲がそのままミスターを見つめていると、今度はミスターが咲の方を向いて目が合うと、またにっこりと笑った。

「寒くないかい？」

優しく心配してくれるミスターの言葉に、咲は頷くとそのままミルクティーを飲み始めた。久々に飲む紅茶がやけに体に沁み渡る。

それから何の脈絡もなく真一に会いたい、と思った。

## 二二 やつと反抗期

自分のマンションを目指して運転する実は、もう見慣れたと言ってもいいかもしれない顔を見掛けた。

いや、資料と一緒に会った時と比べると明らかに大人っぽくなっており、昨日見掛けた時とはずっと余裕のない顔になっている。プツプツ「どうしたの？」

実は車を近付けて声を掛けた。

「あなたは・・・」

疲労が隠せない顔には不安も入り混じっているが、昨日会った実のことは覚えていたらしい。すぐにそのまま言葉を続けた。

「あの、女の子、見ませんでした？背が低くて、こつ、ざっくりと肩まで切った黒髪で、色白で、」

とりあえず思いつくままのキーワードを並べる真一の言葉に、一瞬で咲のことだと実は理解できた。しかし、知っているると即答することはできなかつた。咲が昨日居候先であろう真一の家に戻ることを拒否したからだ。

「その子がどうしたの？」

「昨日の晩、帰ってこなくて、」

ビンゴであった。実がミスターの元へと連れて行った女の子はこの少年の家に居候しているのだ。しかもこの二人の様子を見ると、恋愛でも絡んでいるに違いない。

「一度見ただけの人にそんなこと喋っていいの？一条真一君。正確に言えば昨日が初めてではなかつただけだね。」

真一がハツとした顔になり、実の顔をまじまじと見つめた。その眼には同様の色が隠せていない。

「いい表情になつたわね。」

「あの、その・・・」

「安心して、言わないわよ。こつすれば思い出すかしら？」

そう言つて鎖骨まで伸びていた髪の毛を手で一つにまとめてみると真一があつ、とした表情になった。

「思い出したかしら？」

「・・・マスコミはもう辞めたんですね。」

真一はすっかりと実のことを思い出していた。忘れていた、高校生の頃のある記憶が鮮明に蘇ってくる。

「それからあなたが探している女の子、今日は家に帰るって言っていたからあなたも今日は帰りなさい。」

「！咲に会つたんですか！？」

「間違つてなければ、ね。」

思えば名前を聞いていなかっただったので咲という名前もピンとこないが、おそらく間違つていないであろう。

「咲は無事なんですね？」

「ええ、だから帰りなさい。」

少しだけ実は嘘をついてしまった。昨日の夜出会つた時は全然大丈夫ではなかったたので、無事と言えるかは疑問だったが、今日の朝の様子を見ると平気そうだったのでとりあえず頷いた。今は真一の顔色の方が悪く、思わず心配になつてしまつた気持ちからの行動であつた。

「わかりました、ありがとうございます。」

「送つて行きましようか？」

「いえ、大丈夫です。」

真一は少し考えてから、実の言葉を信用できると判断してお礼を口にした。表情も少しほぐれ、ゆっくりと疲れた体を動かしながら家へと戻つていった。そこに残された実は角を曲がつて真一が見えなくなるのを確認してからまた車を動かし始めた。

「若い人は、少し時間が経つだけで変わるわね。」

おばさんのような独り言を思わず実は呟いた。

少しの時間と言つても、もう二年になる。その時の自分を実は思い出していた。今の真一のように、恋焦がれる人をがむしゃらに追

うことを止めていたその頃は同じように冷めた瞳をしていた。だから真一のことを気になったのかもしれない。

その頃のことを思い出して実は少しだけ胸が熱くなった。

真夜中に家を抜け出したのは初めてだった。優等生だった僕は塾が終わった後も家に直帰していたし、大学に入ってからも夜通しで遊んだことなど一度もない。そんな僕が静枝さんから咲が帰っていないと聞いた瞬間にいてもたってもいらなくなって飛び出した。時間は本当に真夜中で、少し布団に入っていた僕は咲と家まで戻って来なかったことに酷く後悔した。

そうやって初めてのことなのに、特に罪の意識が芽生えたりしなかった。体が疲れているからということもあるだろうが、初めて授業中に居眠りした時のように妙なスツキ感があったのだ。

と、いう能天気な気持ちは玄関のドアを開けた瞬間に消え去ったのだけれども。

「おかえり。」

僕は考えてもいなかったこの状況に目を見開き、その場に立ち尽くした。

「おや・・・父さん。」

いつも心の中で呼んでいた言葉を喉の奥に飲み込んでから、何とか冷静に目の前に立っている人物を呼んだ。

「ちよつと書斎に来なさい。」

そう言つて父さんは背を向けて廊下を歩き始めた。玄関のドアを開けたまましばらく立ち尽くしていた僕は覚悟を決めて、ようやく靴を脱いで家上がった。静枝さんが朝食を作り始める時間だったらしく、台所から心配そうに顔を出した。ほとんど寝ていないのだろう、目が赤く充血し、表情からあつという間に疲れが読み取れた。

「大丈夫。」

そう静枝さんに声を掛けて僕は台所の前を通り過ぎた。台所や居間には人の気配を感じず、母さんはまだ起きていないと僕は勝手に

判断した。

ドアがきれいに閉まっている書斎の前にたどりついた僕はふうーと一度だけ時間を掛けた深呼吸をし、ノックしてから部屋に入った。

「どこに行っていた？」

部屋のドアがちゃんと閉まったことを確認すると、父さんは僕を真っ直ぐに見据えてそう言った。その声はひどく重く、今までに聞いたことのない怖さがあつて僕はまともに父さんの顔を見ることが出来ない。

「・・・散歩。」

「あんな真夜中から？」

僕は優等生の自分を守る為ではなく、怒られたくないという気持ちから嘘をついた。こんな幼稚園児や小学生がするようなこと、もしかしたら初めてしているのかもしれない。

「見ていたんですか？」

思わず敬語口調になった僕が顔を上げると、父さんと目が合った。「お手洗いに行った時に、玄関から出ていく後姿が見えたんだよ。」咄嗟に目を逸らしてしまったので気付かなかったが、父さんの顔にも静枝さんと同じような疲労が見て取れる。昨日は早くに休めた筈なのに、どうして。

「起きていたんですか？」

「またもや僕は敬語になっていたが、それは完全に無意識だった。」

「子どもが真夜中に家を飛び出して心配しない親なんて居ないんだよー！」

相変わらず強いその口調に、僕はまた目を見開いた。怒鳴る、というまではいかないが、明らかに腹を立てているのがわかる。

「なあ、真一。若い内にしか出来ないことは沢山あつて、それをしていたい気持ちもよくわかる。でもな、親に黙って真夜中に外をうろつくことはいいことじゃない。私の言いたいことがわかるな？」

「・・・はい。」

まだ僕には驚きがかなりあって、父さんの言うことを理解する為に少しの時間を要した。でも、親の子どもに対する気持ちに確かにあって、それを感じると不覚にも泣きたい感情が少しだけ込み上げてきた。

「何を、隠している？」

僕はまた目を逸らした。咲のことをまだ言う訳にはいかない。でも、さっきの散歩のように見え見えの言い訳すらも浮かんでこない。父さんの無言の視線がやけに痛い。

「言えません。」

「真一、」

「でも、暴走行為とか周りに迷惑を掛けるようなことをしている訳ではないし、これからは気をつけます。だから、聞かないで下さい。今は言いたくありません。」

どうして僕の口からは敬語しか出てこないのだろうか？血の繋がっている親子なのに。そして、何故僕の視界は少し霞んでいるのだろうか？咲のこと、いつまでも黙っている訳にはいかないことはもうとつくにわかっている。でも、今はまだ言う訳にはいかない。そんな感情が支配している体を僕は自分でコントロールすることができない。

「やっと反抗期か。」

僕が視線を再び父さんに向けた頃、父さんの視線はもう僕にはなかった。椅子から立ち上がり、窓へと歩み寄って明るくなってきている庭を眺めた。窓に映っている顔が少しだけ笑っているように見える。

「わかった、信用しよう。でも、勝手に夜中に抜け出すことはもうしないように。母さんにも今回は黙っておく。」

母さんは僕が一人息子ということもあってかなりの心配性な性格である。何かをしでかせばすぐにわめく姿を簡単に想像出来た。なので、黙っておいて貰えることはすごく助かることで、少しだけ変な力が抜けた気がする。

それから父さんはもういい、と一言だけ言ったので僕は書斎をあとにした。僕の中で色々な感情が渦巻いている。咲への想い、親への罪悪感、そして疲労感。

「ご飯のいい匂いにつられて台所の方を見ると、静枝さんが相変わらず心配そうな顔で僕の方を見ていた。僕は「大丈夫。」と全然大丈夫そうでないぎこちない笑顔を向けた。

そしてふいに咲に会いたい、という衝動に駆られた。

### 二三 さすが実

「顔色悪いよ。」

「さすがに帰ったら？」

重たい体を引きずって学校に行った僕は教室に向かわず、大学の図書館の奥にあるソファで横たわっていた。今まで授業を聞かずとも講義室には顔を出していた僕が欠席したものだから、薫と可南子心配して僕を探しに来てくれた。携帯電話にはメールと着信が何件も入っている。

「んー・・・」

同時に覗き込む二人の瞳に映り込んでいる僕の顔は確かにひどい顔をしている。

「どうしたの？最近やっぱり様子がおかしいよ。」

薫のその言葉に、可南子は思い当たることがあるという表情になったが、特に何も言わなかった。自分が言っているいいことではないと考えてくれているようだ。

その二人の優しさに、僕はとうとう話す決心をした。一人では抱え切れない、どうすればいいのかわからない現実を。

そして、僕の本当の気持ち。

「・・・」

二人が探しに来てくれた図書館を出ると僕達はそのまま大学の外に出た。二人共まだ授業があるにも関わらず、僕に付き添ってくれた。

つまり、今日は三人皆が初めて授業をサボった日となる。

「黙っててゴメン。」

最初からもう今日の授業に出席しないつもりだった僕と、いつもどおりに出席する予定だった薫と可南子の三人で電車に乗り、大学から少し離れた店にやってきた。程よく賑わっているその店は、誰

かに聞かれる心配のないようにテーブル同士が距離のある場所を可南子が知っている店だった。

そしてご飯を食べながら咲のことを話した後、二人は何と云っていいのかわからないらしく、しばらく暗い表情でだんまりとしてしまった。

「.....」

そして僕もだんまりとしてしまった。昼とは思えないこの暗さ、益々次の一言が言いにいくくなる。

「少年！」

聞き覚えのある少し大きな声に反応して振り向くと、昨日携帯電話を届けた社長がそこに居た。その隣には実の姿もある。

「あ、こんにちは。どうしたんですか？」

「今打ち合わせが一つ終わったところなんだよ。少年は友達と食事かな？」

「あ、サカキグループの！」

薫と可南子の声が重なった。その二人の顔と社長の顔を交互に見て、僕は昨日携帯電話を届けに行く際に電車の中で考えていたすごい人の話を思い出していた。

「薫が熱く語っていた、朝のワイドショーで特集されていた人？」

その偶然に驚きながら、妙に納得した自分が居た。昨日のスマー卜な姿を見ていたからだ。

「観てくれたんだね、ありがとう。じゃ、少年、今日の夜は実に頼んでいるから、また後で、bye。実、頼んだよ。」

「わかりました。」

夜の約束をすっかりと忘れていた僕は思わず声を出しそうになったが、何とかこらえた。そんな僕達や実さんを置いて社長はさっさと消えてしまった。

「あの？」

「ああ、今から夜までは仕事の関係で別行動なのよ。夜、お友達も一緒にどうかしら？」

少しも疲れを感じさせない実からも大物感が漂っている。そんな実が誰だかわからない薫と可南子はポカンと口を開けてただ実の顔をじっと見ている。

「申し遅れました。 榊社長の秘書、木崎実きざきみのりです。」

そう言っ取り出した名刺を実さんは僕、薫、可南子の順番で渡していく。おそらく生まれて初めて貰う名刺をどう受け取ればいいのか、そして受け取ってからどうすればいいのかわからない僕達はとりあえずつぶさないようにそのまま握りしめる。

「取り敢えず今日の夜七時に会社まで迎えに行くから。 場所変えたいならその名刺に番号書いてあるから電話して。 折角だから友達もどうぞ。 じゃ、私も仕事があるから。」

そう言っ実もさっさとその場から居なくなってしまった。 社会人のテキパキとした働きぶりを目の当たりにした学生三人は暫くそこでポカンとしていることしかできなかった。

「真一、またいつでも話聞くから。」

「話してくれてありがとうね、真一君。 嬉しかったよ。」

暫くの間を過ごしていた店をようやく出た頃、空はもう薄暗かった。 勿論と言ったら失礼かもしれないが、いい解決策が浮かびはしなかった。 それでも僕の心は大分軽くなり、二人の優しい言葉に思わず泣きそうになった。

「ありがとう。」

心からの気持ちであった。 本当の友達とは本音が言えて、そして安心させてくれる存在。 それを二十歳手前で知るなんて、僕は何と勿体ない人生を今まで過ごしていたのだろう。

薫と可南子と別れたその足で実さんとの待ち合わせ場所である会社へと向かい始めた。 正直あまり気は進まないものの、約束だから仕方がない。 それに、疲れてもバイト先へと向かった咲の後姿を思い出すと、行きませんなんて電話出来る筈がなかった。

「真一！」

ビルの入口に到着して携帯電話で時間を確認しようとする、タ  
イミングよく実さんが声を掛けてきた。

「丁度良かった、今車を出してくるから。」

そう言っただけで、テンプポ良くヒールを響かせて僕の横を通り過ぎたかと思つと、すぐに車でやってきて僕の目の前で止まった。

「さつき社長からまた確認の電話があつてね、本当に一緒に食事が出来ることが嬉しいみたいよ。」

「えっ？」

「有名になると下心を持って近づいてくる人が多いからね。一人の人間として食事がしたいって言われたのが久々なんじゃないのかしら。」

「あ、そう言えば暫くアメリカに居たんですね。日本に家族は居ないんですか？」

「それが、さつぱり。探偵事務所、マスコミのコネがある私ですら素性をつかめないんだから。」

調べたんですね、と探るのは止めておいた。前に実さんがマスコミ時代に会った頃のイメージからすると、罪悪感もなく淡々と調べたということがすぐに把握できたからだ。

悪い意味ではなく、気になったことはとことん調べるといふ行動力は本当にすごいと思う。

「実さんはいつから社長秘書に？」

「もう一年になるかしら。マスコミを辞めてすぐだから。」

「どうしてまた？」

「たまたま取材した社長に引き抜かれたのよ。正直マスコミも天職とは思えなかったから、あっさりと変わっちゃった。」

そうあっさりと告げる実さんの雰囲気は、二年前に知り合った時と比べると随分柔らかくなっている。きつとお互い様なのだろうが、「それにしては社長も少年少年って、ちゃんと名前で呼ばないなんて失礼よね。」

信号待ちで止まっている車の中に、ただエンジン音だけが響き渡

った。

「名前、そう言えば言っていない……はず……」

変な引っかけがあつて、僕は言葉がどんどん小さくなつていった。そう、自分の名前を一度も言った記憶がなかったし、きっとその記憶は間違えていない筈だ。強烈な印象が残っているけど、実際に喋った時間はほんの数分。のうのうと自己紹介なんかしていない。それなのに、何が引っかけるところだろう。

「あら？でも、昨日真一のこと名前で呼んでなかった？」

信号が青に変わり、僕のことをもう呼び捨てする実さんが再び車を動かし始めた。僕は黙つて昨日の流れを思い出す。携帯電話を持つて行つて、社長と会つて、今日の約束をして、実さんが現れて……

「あ。」

僕は重要なことを思い出した。昨日は特に何も気づかなかつたが、おかしなことに気が付いた。

「呼ばれた。」

「でしょ？私それで真一のこと思い出したんだから。」

そう、実が資料を漁っている際に真一と社長とのやり取りを思い出してから答が見付かつたのだ。

『まだ真一と喋っている途中なんだよ。』

実が社長を呼びに来た際、確かに真一の名前を呼んでいた。教えていないのに、何故？

急にどうしようもない不安が真一を襲つた。このまま会いに行つてもいいのだろうかという不安に。

だが、他に何が出来てもなく、ただ真一は実の運転する車に乗っていることしかできなかつた。どうすればいいのかわからない、そんな何も思いつかない自分を呪つた。



## 二四 真一です

「少年！」

実さんが選んだという店は学生が来るには高級そうで、かと言って働いても一生に一度しか来ることができないような店かというところでもなさそうであった。僕が学生で、未成年であることを考慮してくれたのであろう。

「お忙しいのに、ありがとうございます。」

僕がそう挨拶すると社長に座るように促されると、実さんは「じやあ私はこれで。」と、その場から居なくなってしまった。二人きりとは思っていなかった僕は不安がいつそう強くなった。

「実が注文をもう決めているようですね、食べ物は何も何が来るかわからないんだ。でも飲み物は好きなのを頼んでくれ。」

そう言いながら僕にメニューを渡してくれる社長は本当に嬉しそうな顔をしている。こんな真っ直ぐな瞳が僕を脅かすなんて、そんな筈がないと信じたい。

「さて、何を話そうか？」

「あ、あの社長。」

「榊でいいよ。」

「じゃあ、榊さん、あの・・・どうして会社を経営しようと思ったんですか？」

どうして名前を知っているのかを聞きたかったが、どういつ尋ね方をすればいいのかわからずに、全然考えてもいなかった質問をした。

「自分で何かを創りたかったんだよ。」

僕の目を真っ直ぐに見据えてそう榊さんは切り出した。

「私が極道に居たことは知っているかな？」

「あ、はい。」

薫から聞いた話を思い出すと、割と早い段階で思い出せた。

「その時に全てを捨てたんだ。家も、名前も、全部ね。私が居た組は仁義がしっかりしているところだったから、無駄に命に怯えることはなかったけど、さすがにそういかなかった時にアメリカに高飛びしてね。実力があれば誰もが認めてくれる世界に驚いたよ。その時の日本は、今では想像できないくらい家柄の影響がすごかったからね。」

榊さんの元にワイングラスが置かれ、ワインが注がれていく光景を僕はぼんやりと眺めながら自分の元に運ばれたウーロン茶を静かに受け取った。

「それでゆくゆくは自分も実力での上がるうって思った結果こうなったんだ。」

誇り高く話す榊さんはその後ワイングラスを持って乾杯しようと促した。ウーロン茶の入ったグラスとワイングラス、おかしな組み合わせ同士音が軽く鳴り響く。

単純なのに、決して簡単ではないその理由に圧倒された真一は一口飲んだウーロン茶のグラスをそのまま握りしめていると、オードブルが運ばれてきた。

「すごいですね。」

やっと出てきた言葉を言った後、僕は生ハムがのっているモツオレラチーズと一緒に口へと運んだ。口の中で無理やり噛み砕きながら頭の中で話題を必死に探すも、何も浮かんでこない。本当に頭のいい人はこんな時苦痛に感じないのだろうな、という考えが余計に話題探しの邪魔をした。

「そんなに固くならないで、relax, relax!」

緊張した僕を見越しているらしく、榊さんがそう声を掛けてくれた。その優しい瞳を、今の僕は真っ直ぐに見ることが出来ない。

「あの・・・家族は？」

「またもや何とか思いついた質問を口にした。さっきと違うのは、榊さんからの返事がすぐに返ってこなかったことだった。顔を上げると、榊さんが困った顔で僕の方を見ていた。」

「ナスとトマトのスープとじゃがいも・ベーコンのジェノベーゼスパゲッティです。」

店員さんが小難しい次のメニューを置くと共に榊さんの空になったお皿を回収していった。僕のオードブルはまだ残っている為、テーブルの上が少し狭くなった。

「あ、ごめんなさい。言わなくていいです。」

慌ててそう言った後に僕は残っている最後のモツオレチーズを口に頬張った。さつき生ハムと一緒に取り損ねたせいで一つだけポツンと残ったそのチーズは味がない訳ではないが、単独で食べる気もあまり起こらない味だった。

「少年は本当に優しいね。」

ウーロン茶で何とか口の中のチーズを流し終えた僕は榊さんの方を見た。今度は、榊さんに負けないよう、真っ直ぐと。

「真一です。」

半分以上空になったグラスを握りしめたまま、榊さんを見据えながらもう一度言った。

「真一です。」

「真一。」

榊さんが僕の名前を軽く呼んだ。頬が少し緩んでいる。呼び捨てで呼び合うことを決めた時の薫の表情と似ている気がした。名前はお互いを知る最初の第一歩、僕が名前を教えることで心の距離が近づいた気がしたのは、きつとお互いを感じ取ったことであっただろう。

「真一、冷めない内に食べよう。」

そう言って上品にスープやパスタを消費していく榊さんに少し見とれかけながらも僕も必死にスプーンやフォークを動かした。

結局食事中に聞きたいことを質問出来なかった僕は内心あまり穏やかでなく、どうしてもご飯を素直に美味しいと思うことが出来なかった。それでも、榊さんの話は面白く、他愛もない話は終わりまで続いた。名前を教えただけで、呼ばれるだけで変化しすぎこちな

い空気に流され、このまま聞かなくても良いのではないかという衝動に駆られた。

曖昧になってしまっている咲との関係のように、逃げたい自分が居ることに気が付いていないふりをした。

「今日は本当に楽しかったよ、ありがとう。」

会計を終えた榊さんが僕にそう声を掛けた。少しは自分で出すと言ったが、頑なに受け取ってくれなかった榊さんはそのことを誇示することもなく、まだ少年っぽさが残る笑顔である。

「いえ、こちらこそ本当にありがとうございました。」

「また一緒に食事しよう。今度は是非友達も一緒に。」

ドアを開けると冷たい空気が僕達を襲った。昼の気温はまだ高い為、厚着をしていない格好の僕には少し応える気温である。

「大通りに出よう、タクシーがここじゃ捕まりにくそうだ。」

「榊さん！」

そう言っただけでスタスタ歩き始める榊さんを僕は背後から呼び止める、軽やかな動きで榊さんが振り向いた。

「あの・・・電車で帰りますから。」

本日三度目の失敗に、僕はもう本当にどうでもよくなり始めた。

未成年なのでお酒は飲んでいないが、ワインでホロ酔いになった榊さんを見ているとそれだけで僕も酔ってしまったかのように、頭の中で考えがまとまらなくなっていた。きっと僕の顔が真一っぽくてたまたま言ったら当たったのだ、なんて万が一の確率にもないことを思ってしまった。

何より、こんなにいい雰囲気の人を疑いたくなかなかかった。

「そうか。でも、どっちにしても大通りに行かなくてはいけないね。」

「そう言っただけでまた榊さんが歩き始める。その背中を僕は慌てて追いかけて右横に並んだ。僕より拳二つ分くらい高い背の榊さんの横顔が、ふいに懐かしく感じられた。」

誰かに似ている？

「少し遅くなっただけど、親御さんは大丈夫かな？」

「あ、はい……！危ない！」　ゴンツ

言い終るか終わらないかの時、僕の左肩に鈍い痛みが走った。後ろから棒で殴られそうになった榊さんを庇うと同時のことであった。

「真一！」

「真一！社長！」

どこからともなく実さんの声とヒールの音が聞こえ、棒を持った男が宙を舞った。

「Quick!!」

「大丈夫？」

一度地面に膝をついた僕が顔を上げると榊さんは電話で警察を、実さんは暴れる男を地面にうつ伏せて逃げられないように拘束していた。肩の痛みも忘れて僕が啞然としている間にパトカーが訪れ、凶器である棒と共にその男はパトカーの中へと押し込まれ、その場からすぐに消えていった。

「その時のこと、詳しく聞かせてくれますか？」

「Shit！病院が先だろうっ！」

「私が残って話します。一部始終見ていましたから。」

榊さんの一言に、迎えに来てくれていた実さんの心遣いの後、この現場に残った警察の人が失礼しましたと一礼し、他の警察の人に付き添うように言付けした。僕と榊さんはその警察の人と共に病院へと向かい始めた。タクシーの後部座席に男三人で乗った狭苦しさは上手く表現することが出来ない。

が、それよりも謝る時の、本当に辛そうな榊さんの表情の方が僕の心の中にずっと残った。

## 二五 痛みと困惑と無言

「先日、テレビでも特集されたサカキグループの榊 信二しんじ取締役が木片を持った男性に襲われ、一緒にいた男性が怪我を負うという事件が発生しました。その場で取り押さえられた容疑者は無職の男性で、金品目的で襲ったと供述しており、今後細かい動機を・・・」

僕が救急で診察を終えて痛み止めの薬と湿布が出されるまでの間、待合室のテレビからは早速僕達のことをニュースになっていた。さっきの今、詳しい情報は入っていないものの早々とニュースになってしまう榊さんの偉大さを僕はまるで他人事のように感じ取っていた。

「榊さん、元氣出して下さい。実さんも。」

捻挫と診断された僕はソファにがつくりと頂垂れた榊さんと、事情聴取を終えて駆け付けてくれた実さんに何だか申し訳ない気持ちになってきた。

「私ともう少し明るい場所にある店を選んでいれば。真一、社長、本当にごめんなさいね。」

優秀さが溢れている実さんが僕と榊さんに深々と頭を下げた。気の強ささえ感じられるいつもの表情と違って儚さが滲み出ている実さんを綺麗だと不謹慎にも思ってしまった。

「一条さん。」

「あ、私貰ってきます。」

薬が用意出来たらしく、薬剤師が時間外窓口から僕の名前を呼ぶと実さんがまたもやヒール音を鳴らしながら受け取りに行ってくれた。夜の静かな病院の廊下では音が必要以上に響いているが、心なしかいつもより元氣のない音に聞こえる。

「やっぱり、真一のような純粋な少年が私に関わってはいけけないのだよ。」

消え入るような細かい声に驚いて振り向くと、榊さんが少しだけ

顔を上げていた。さっきの食事の時とは打って変わって、後悔の入り混じった暗い表情をしている。

「何言っているんですか？」

「今回は金品目的だったけど、昔は極道にも居たんだ。いつ狙われてもおかしくない筈なんだ。わかっていた筈なのに……。」

榊さんがまたもや膝の上に組んだ両手に顔を埋めた。僕が診察室から出て来た時は椅子から立ち上がったものの、それからはずっとこうだ。きつと僕の診察中もそうだったのだろう。

「真一さん！」

「静枝さん!？」

実さんが薬を受け取って僕の元に戻ってくる間、静枝さんが小走りで見寄って来た。

「静枝さん、膝。」

「私はいいんですよ！真一さん怪我は？もう警察の人から電話が掛かって来た時は本当に心臓が止まるかと思いましたがよ。」

年齢のせいもあってか静枝さんは少し膝を悪くしているので運動は出来ない筈なのに、一刻も早く無事を確認しようと息を弾ませながら僕の目の前まで辿り着いた。

「すみませんでした、私のせいで。」

「いえ、私が悪いんです。すみませんでした。」

とりあえず無事であると安心した静枝さんに榊さんと実さんが続けて頭を下げた。勿論静枝さんはこの二人を知らないのです、どう反応して良いのか迷っている。

「いやいや、二人のせいじゃないですから。悪いのは犯人です！だから頭を上げてください。」

そうやって僕が必死になだめるも、二人の暗くなった表情はそのままであった。僕がもう少し大人だったら、もっと気の利いた台詞を言うことができたのであろうか。

「静枝さん、この二人はね、ある会社の社長と秘書で、えーと……友達？と言うか知り合いになってご飯をご馳走になってその帰りに

襲われんだよ。この二人は全然悪くない。」

取敢えず静枝さんに簡単な説明をし終えた頃、榊さんが僕の後ろを見据えて固まってしまっていた。驚いているのか、目に困惑の色が見て取れる。

「旦那様！どうしてここに？」

先に気が付いた静枝さんの言葉に振り向くと、同じく困惑の色を目に宿した僕の父さんがそこに居た。その目は僕ではなくて榊さんをはつきりと見据えている。

僕は直感的に胸がざわめいた。

「二人ともどうしてここに。」

榊さんから目を逸らした後、僕と静枝さんを交互に見やっってから尋ねてきた。僕の頭の中に大きなクエスションマークが現れた。父さんの言った意味がわからなかったのだ。

静枝さんが僕を迎えに来てくれたということは家にはまだ父さんと母さんが居なかったからだろう。病院に向かう前に静枝さんが父さんに電話をしたのだったら母さんも一緒の筈だし、今の発言も説明することが出来ない。

それだったら、考えられる理由はただ一つ。

榊さんに会いに来たのだ。

さつきもニュースで流れていたように、榊さんの情報を手に入れることは簡単だった筈だから。

「榊さん？」

急に榊さんが僕達に背中を向けて歩き出した。

「帰るぞ。」

真っ直ぐな廊下を歩いていく榊さんの背中がどんどん小さくなっていく。追いかけてようか迷っていると父さんがぼくの右腕を引っ張りながら時間外出口の方へと歩き始めた。痛みがあるのは左肩なのに、握られた右腕にも痛みが走るのは、父さんがそれなりに強い力で握っているからだ。

「父さん・・・？」

一度だけ名前を呼ぶも、父さんは何の反応もない。後ろを振り返ると実さんが静枝さんに僕の荷物と処方された薬を渡し、僕の方を見やった。実さんも僕と同じく混乱の気持ちが見え隠れしていない。

自動ドアが開いた瞬間に一瞬で寒さを感じる。その空気の冷たさが僕の不安をより一層強くさせた。

「辛くないですか？」

タクシーの後部座席で僕の左側に座った静枝さんが心配の声を掛けてくれる。耐えられない程の痛みではない僕は笑顔で頷くと、静枝さんが少しだけ安心した表情に戻ったので僕も何だか穏やかな気持ちになってきた。

しかし、助手席に座っている無言の父さんの姿を見るとまた不安が押し寄せてくる。じつと無言で外を眺めている父さんの後ろ姿が、どうしようもなく僕の胸をざわつかせた。

「どうしたの!？」

家に帰るや物凄いパニックに陥った母さんを父さんと二人でなだめている間に僕にどっと疲れが押し寄せ、心配する両親や静枝さんに促され自分のベッドに倒れ込んだ。

この瞬間は咲のことが頭からすっかりと消えていた。きっと、咲が現れてから初めてのことだったと思う。

次の日、咲が心配で眠れなかったのだろう、真っ赤な目をして泣きそうな顔になっているのを見た時、何とかして咲に会いにいかなくった後悔をする羽目になる。

## 二六 会いたくて会いたくて

「辛くない？欲しいものない？」

昨日の今日、学校を休んだ僕に母さんがつきつきりで質問してくる。父さんは仕事が忙しくてどうしても休む訳にはいかず、その代わりに母さんは僕が心配だからと静枝さん共々僕につきっきりの状態であった。

「大丈夫だつて。全治十日の打撲だし、今日学校に行けないこともなかったくらいなのに。」

今のソファにもたれかかり、いつも以上に心配性になる母さんをよそに僕は時計が気になって仕方なかった。静枝さんによると咲のバイトは昼からで、今は静枝さんの部屋に居ると言うのだ。一刻でも早く会いに行きたいのに、母さんが居るとそれが出来ない。そわそわしながら母さんと話をしていると、玄関のチャイムが鳴った。

「真一！」

「真一君！」

小走りの足音がしたかと思うと、薫と可南子が部屋に入ってきた。昨日、榊さんと食事に行ったことを知っていた二人は何回も電話やメールを送信してくれ、今朝「大丈夫」と返信したのに、心配で家にお見舞いに来てくれたのだった。

昨日の今の時間帯も図書館で同じようなやり取りを交わした僕は、二人の温かさが本当に嬉しかった。

「えっと？あら、もしかして、可南子さん・・・？」

初めて見た薫に、可南子。母さんは二人を交互に何回か見やった後、可南子に取り敢えず挨拶をした。

「初めまして。急にお邪魔して申し訳ありません。真一君のことが気になって。」

「あ、そうなの。でも・・・」

はきはきと丁寧な言葉を並べた可南子に対して母さんは明らかに困

惑しているのが見て取れた。

「今は友達として仲良くしてるんだよ。そしてこちらが板橋薫君。高校まで同じクラスになったことなかったけど、今すごく仲がいいんだ。」

慌てて入れた僕のフォローに何とか母さんが納得したかな？と思つた頃、今度は家の固定電話が鳴り響いた。

「はい。」

いつも通り静枝さんが電話を取り、話を進めていく。その光景を見て可南子が

「やっぱりすごいなあ。」

とポツリと呟いた。僕が小さい頃から静枝さんはこの家で働いてくれていたから特に何とも思わなかったけど、考えたら家にお手伝いさんが居るということは珍しいことなのだ。その静枝さんが家のことを全てしてくれる光景には一度来ただけでは慣れなかったようだった。

「何が？」

薫が真顔で可南子に質問をした。僕の家族構成を知らないからではない、きつと薫の家にもお手伝いさんがいるからだろう、何がすごいのが理解出来なかったようだった。

「どうせ私は田舎の凡人ですよ。」

可南子の呟きは当然のように聞こえるのは、僕が自分の小ささを最近続けて感じたからだろうか。

「奥様。」

静枝さんが母さんを電話口に呼び、僕の周りには薫と可南子の二人になった。

「ねえ、咲ちゃんは？」

「一応気を使って可南子が小声で僕に尋ねる。」

「まだ会えてない。」

僕も小声で返す。しかし、そんな気の遣いが必要の無い程母さんと静枝さんが慌ただしくなった。

「真一、お父さんに呼ばれちゃったけど、一緒にいなくて大丈夫かしら？」

本当は僕の傍に居たいと言わんばかりの表情である。しかし、前に咲が話していた大臣云々のことだろうか、周りがごたごたしている中親父は忙しいらしく、母さんをヘルプで呼びたいようだった。そしてそんな親父のことも心配で仕方ない母さんはその頼みを断れないようだ。

もしかしたら、親父の計らいなのかもしれないけど。

「大丈夫だよ。父さんをしっかり手伝ってあげて。」

僕のその一言に母さんは頷き、静枝さんと慌ただしく準備を済ませて父さんの元へと行った。

「じゃあ薫君、私達も学校に行こうか。」

「え？」

母さんを玄関まで見送って居間に戻ると、可南子がそう切り出した。てつきり一緒に咲に会うと思いついていた僕は思わず驚きの声を上げてしまった。

「結構元氣そうで安心したし、咲ちゃんと二人でゆっくり話しなよ。」

薫も同じ気持ちだったらしく、鞆を持ちながら立ち上がった。

「咲ちゃんの居所に困ったら私の家でも大丈夫だから。」

「授業代わりにしっかり聞いておくから。」

僕が引き留める間もなく可南子と薫はそう言い残して僕の家を後にした。

「いいお友達ですね。」

「うん。」

静枝さんが玄関の鍵を閉めながら僕に言ってくれたその言葉を僕は素直に受け入れた。そしてすぐに咲の居る離れへと急いで向かった。

何を言えばいいのかなんて迷うこともないくほど、咲に取り敢えず会いたいという気持ちで一杯になっていた。

静枝さんの部屋のドアを乱暴に開けると、体育座りの状態で膝に顔をうつ伏せていた咲が反応して顔を上げた。真っ赤な目をして今にも泣きそうな顔の咲を見ると僕は思わずホッとしてしまった。まるで立場が逆で、咲が怪我をしたがその怪我が大したことないと思われるようなように。

「怪我」

「平気。打撲だから。」

僕は咲の言葉を遮って傍に寄った。二日間会っていなかっただけに、久しぶりに見た気がする咲の顔は更に小さくなってしまったように感じた。昨日静枝さんから聞いて心配してくれていたのだらう。

何とかして会いに来なかった自分を責めた。

「咲。」

名前を呼ぶと共に怪我をしていない右腕で咲を抱き寄せた。動く時に左肩に一瞬だけ痛みが走ったが、そんなこと構わずに右腕に力を入れた。

咲の体温を感じるとまたホッとし、僕の中で咲の存在がどれ程大きくなってきたのかを思い知らされた。

「咲。」

もう一度名前を呼ぶと、咲が両手を僕の背中に回し、服を軽く掴んだ。少し手が震えている。

愛しい。

僕の頭の中にはもうそれしか浮かばなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8650e/>

---

全力少女・サキ誇れ！

2011年2月5日18時10分発行